過ぎ去りし日々～大学編～

安部由理野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過ぎ去りし日々～大学編～

【Ｎコード】

Ｎ９６８７Ｋ

【作者名】

安部由理野

【あらすじ】

中学からの幼馴染、柿沢友里菜と大久保芳人は高校は別々、そして大学の進路も場所も別々になっていった。音楽家を目指す友里菜は関東、医師を目指す芳人は関西と。物理的にも二人の間には距離が立ちはだかる。果たして、この幼馴染の恋のゆくへは？　そして二人の青春は？

1　桜の園（前書き）

離れ離れになった友里菜と芳人。二人の恋と青春はどうなっていくのだろう……。
約１０年前の４月からの物語です。

1　桜の園

過ぎ去りし日々～大学編～

1　桜の園

柿沢友里菜は、憧れの女子大の門をくぐっていた。天気はまあまあの晴れ。
まず最初に友里菜が目にしたのは、淡いピンクのソメイヨシノの花が、学園全体を覆っているメルヘンな風景だった。

―　やっぱり、女子大は雰囲気が違うわ～。前の高校とは偉い違いや。

「どうしたの、友里ちゃん。足を止めちゃって」
と母方の叔母が、覗きこみながら聞く。
「そうよ、どうしたの？」と叔母の隣の母親もそう尋ねた。
「いや……なんか、嘘みたいで。本当にここに入ったんだなぁって思って」
「か・ん・ど・う？」と叔母が茶化したように言うと、上品に微笑んだ。
「うん、まぁそうかな」
友里菜は照れ笑いをしてしまう。

１９９９年４月の入学式のＦ女子大は、まるで桜の園だった。校門目指して、友里菜達だけではなく、様々な新入生達が母親や両親と思しき中年の人々に付き添われてどんどん中に入って行くのだ。その有様は優雅でかつ壮大、そしてどこか友里菜には気後れする。
このＦ女子大は、明らかに中流から上の家庭の女子生徒ばかりだ

と思われる。あちこちに、控えめに各クラブの先輩達が、これまた控えめに勧誘の看板を持っていたり、チラシを配ったりしていたものの、全体に落ち着いていて全然騒がしくは無く、やはりまごうかたなき“女子大なのだ”という気がするのだ。

そして程なく歩くと、真正面にチャペルがそびえ立っていた。辺りは芝生。そして周りの建物は、どこか古風な修道院を思わせる。それは以前友里菜が付き合っていた、肝付隼人の居たミッション系学園を彷彿とさせるのだ。ここもミッション系で、どこか静謐な趣が全体のキャンパスを支配していた。

そう言えば、隼人も今頃そのまま高校と同じ大学に進学したはずだ。彼との思い出は少し酸っぱいが、けれどもいい経験だったとも思う。

―　でも、やっぱり芳人がいい。芳人……今頃、何してるのかな？

予備校に入ったのかな？

けれどもその思いは、直ぐに打ち破られた。

チャペルの荘厳さ、女子大特有の女性だけの園の甘い雰囲気が、友里菜を酔わせる。入口で、新入生と父母の列と分けられたのだ。これからは一人。そして未知の世界が友里菜を待つ。

入口の新入生用の席には、上級生達が立って出迎えていた。

「いらっしゃい。あなたの名前は？」

ハキハキした関東弁で、大阪から来た友里菜は少しだけちぢこまった。けれども、その上級生の物腰は穏やかで、ニッコリと笑い、友里菜の緊張した心をほぐして行く。

「あ、わたしは音楽学部の柿沢友里菜です」

なんと誇らしい響きなのだろう。“音楽学部の柿沢友里菜”……。

まるで突然少女から、大人の女子になったみたいに。
「ようこそ、柿沢さん。音楽学部の席は右よ。１７番の椅子。あの人に案内してもらって」
　指差されたそこには、背の高い美しい上級生が手招いていた。まるで春霞に包まれているような、ろうたけた佇まいの人……。友里菜は、同性である女性に対してうっとりとしたことは、生まれて初めてだったので、少しだけうろたえた。

「じ、１７番です」
「ああ、こっちよ」とその美しいとしか言い様の無い上級生が、微笑みながら友里菜を案内する。まるで夢の中のような気がした。
　案内のままに、友里菜は講堂になっているチャペルのその席に座った。すぐ右隣には、一人の小柄だが少しふっくらした少女が座っており、その少女はチラッと友里菜を見上げた。どこか、ツンとした雰囲気の少女だった。

「ここが１７番」
　そう一言告げると、その美しい上級生は去った。
「あなた、１７番？」と隣の席の少女が尋ねた。甘ったれたような、どこか上から目線の言い方だ。
「ええ。あなたは？」
「わたし、１６番。あなたも音楽部？　ピアノ？」
「いえ、わたしは声楽」
「あれ？　試験の時、あなた居たっけ？　わたしも声楽なのよ」
「そうですか？　はい、わたし居ましたけど……」
「その言葉、どこか訛りがあるわね」
「大阪から来たので」
「あ、そう」
　それだけ聞くと、その少女は真っ直ぐ前を向いたままになった。

「あのう……貴女のお名前は？　わたしは、柿沢友里菜と言います」
「え？　名前？　わたしは、伊藤有紀」
「いとう　ゆき？」
「そう。有るという字に、何世紀の紀。あなたは？」
「柿の木の柿沢に、友達の友がゆで、里の菜の花の菜で、ゆりな」
「ゆきとゆりな、か」とその少女は少しだけ笑った。笑うと案外可愛い。それが、伊藤有紀との最初の出会いだった。
「名前はね、ＡＢＣ順になっているのよ、ここでは」
と有紀が囁いた。「ミッションでは、大抵そうなのよ。だから、いつも隣になるわね」

桜の花に囲まれたキャンパス。そして、ここはまさに桜の園と言った趣があった。友里菜はじっと座りながら、まるで夢の中に彷徨っているように入学式に臨んだのだった。

1　桜の園（後書き）

過ぎ去りし日々～高校編～からの続きです。やっと！書き始めました。又宜しくお願いいたします。

2　何もかも違って

2　何もかも違って

入学式はパイプ・オルガンの奏楽と共に、厳かに始まった。国旗など何も無く、正面には簡潔な木の十字架と校章があるだけの質素な式かなと思ったのも束の間、背後からオルガンの華やかな音色と、清冽な賛美歌が聞こえて来る。校歌はあったものの、それよりも賛美歌の調べの方がより勝っていた。

院長、校長などの祝辞と共に、チャプレンと呼ばれている“学校付き牧師”の短いが意義深い説教があった。友里菜はただただ驚いて、身体を硬直させて聞いていた。

直ぐ隣の伊藤有紀が、友里菜を少し突いて囁いた。

「あなた……こういうの、初めて？」

「え、ええ。ミッションは初めてで。その上、わたし、公立高校出だから」

「ふぅん」とだけ有紀は言うと、直ぐ真正面を向く。その横顔は、少しだけだが高慢にも感じる。けれども友里菜はそんなことよりも、この場の雰囲気に完全に呑まれていた。

―　隼人って、こういう雰囲気で育ってたんだ……。道理でどこかわたしらとは違う感じがしてたなぁ～。

「あなた達は自分の意志でここに来たと思っておられるのでしょうが、それは違うのです」

と背の高い、３０代とおぼしきチャプレンが喋っていた。

―　自分の意志じゃないって？　じゃあ、誰の意思？

「あなた達をここに導いたのは、神です。言わばそれは、約束されていた事なんです」

―　神様が！？　じゃあ……それって、運命だって言うの？

「いちいち驚いちゃダメよ」と有紀が囁いた。余程友里菜はそれと分かるほど緊張し、又狼狽もしていたのだろうか……。

「うん、分かった」と友里菜は、頬を赤らめてうなずいた。

式後、叔母と母と共に電車に乗った友里菜は、どこか解放されたような、けれどもワクワクする気持ちを抱きながら語ったのだった。

「なんか……何もかも違うんやね～、ミッションの女子大って。今までずうっと男子と一緒だったから、何か変な気持ちになっちゃった」

「授業が始まるのは、三日後からだけど、わたしは明日大阪に戻るわ。いい？」

と母親が言った。

「うん」と答えた友里菜だったが、ちょっぴり不安が出て来てしまう。

明日から叔母の家で居候するのだ。余り気が進まなかったが、とりあえず半年は叔母の家から通う事になった。本当は一人暮らしがしたかったのだが、それも仕方ない。

ピアノが置けるマンションは余り無かったし、さりとて寄宿舎に入るのも躊躇われたからだ。

叔母は母の妹で、叔父と結婚しているものの、子供が無かった。にも係らず、かなりの邸宅で、ピアノもあるし、部屋も8畳の部屋が空いていたからだ。少しでも父母の負担を軽くしてあげたいと、その時は友里菜もそう思っていたのだが……。

少し高級なレストランで食事をした後、三人は横浜の郊外の叔母の家に帰った。

友里菜がホッとして、あてがわれた自室へと戻ると、メールが来ていた。芳人からだ。

『入学式、どうだった？』

直ぐに友里菜はレスをする。

『疲れた。けど、凄く綺麗なキャンパス！通うのが楽しみ＾＾』

―　そうだ。今日から芳人も予備校だったんだ……。

大阪の豊中にある予備校では、芳人と羽島淳平が医学部志望クラスに入り、何とか一浪で医学部を目指して席を並べていた。

「メール、どや？　来てた？」と淳平が芳人の携帯を覗くと、

「うん、まぁな」と芳人はニタつく。「楽しそうやな～」

「いいなぁ。志望校に入った女子は！　お前のカノジョ、音楽家になるん？」

「まあそう言ってたけどな……将来は分からへん」

「離れていたら、その内新しいカレシが出来るんとちゃうか？　気いつけな、芳人っ。カノジョって、美人やろ」

「美人って言うより、賢いって顔やな。そして……可愛いぃ」

「ふふん、にやけやがって。もう」

淳平は芳人を突いた。

「そら。先生が来たぞ」

との淳平の耳打ちで、芳人はやっと我に返り、携帯の電源を切った。

やって来た新栄ゼミナールの数学の教師は、いがぐり頭の若い教師だったが、開口一番こうのたまったのだった。

「みんな、来てるか！　いいか、最初に言っておく。自分達がエリ

ートではない、と思うものは、即刻ここから出て行け～！　卑しくも、ここ新栄ゼミに来る者は、一般人とは違うという認識にたってもらいたい。
よって、君達は人の上に立つエリート集団である。以後、そのつもりで。いいな！！」

全員が呆気に取られていたが、やがて、
「は、はい」
「あー、はい」と言う間の抜けた返事が返ってきた。
「何だぁ、その返事は。日本人男子たるもの、もっとちゃんと返事せんかい！」
とがなる教師に、生徒達は一斉に「はいっ！」と答えたのだった。

この高橋という数学教師に対して、芳人はふと奇妙な違和感を覚えた。けれども、四の五の言っていられない。確かに、そのような気構えが無ければ、この受験戦争は勝ち残っていけないかもしれないのだ。
芳人の家はまあまあの中流なのだが、淳平のように財政豊かな家でもない。よって、どうにかして、国立か公立の医科大に入らなければならないのだ。自分の為にも、そして友里菜という女性を射止める為にも……。
―　けど、何か想像とは違ったな～。僕ら、右翼的エリート集団じゃないと思うんやけどな、医者って。僕は甘いのかな？
それが芳人にとっての鬼教師、高橋先生との出会いだった。

3　クラスメート達

3　クラスメート達

友里菜は最初の登校日から、常にキョトキョトと落ち着かなかった。

遅刻せずに無事に着いたものの、自分の部屋に行き着くのにまず一度は迷って失敗してしまった。

音楽学部の一年生は、同じ部屋だった。そこは大部屋と呼ばれていて、部屋の中に楽器を置く場所と椅子と大きなテーブル、各自のロッカーがある。廊下にロッカーがあった高校とはえらい違いで、それからして友里菜はどうして良いか分からないのだ。

「柿沢さん」と背後から呼ばれて、友里菜は振り向いた。そこには見知らぬ生徒が居た。色白で背が高い。

「柿沢さんよね」

「ええ、はい」

「わたしは、長渕響子。響くと書いて、響子と呼ぶの」

「ん。なんか、音楽的な名前ですね」

「まぁね」と響子は言う。「あなた、関西から？」

「ええ」

「わたしは、福島。会津よ」

「会津？　なんか、遠い所ですね」

「でもないわよ。福島だけど、中通りや浜通りじゃないから、会津だからね会津」

「中通り？　浜通り？」

友里菜には何が何だか分からない。響子は訝しげな友里菜にイライラしたようだが、フーッと吐息を漏らした。

「ま、いいわ。わたし達、どちらも声楽で他所から来たってことは一緒ね」
「ええ」
そう言いつつ、響子の言葉にどこか微かな訛りがあるのに気付いた。けれども、友里菜にも関西訛りがあるのかも知れないのだ。友里菜はそれについては黙っていた。ふと気がつくと、隣には例の有紀が居て、ニンマリと微笑んでいた。

「あ、伊藤さん、お早う」
「お早う。早速友達出来た？　ああ、あなた達、関東の人間じゃないんだ。どちらも」
そう言うと、有紀は離れていった。

「なんか、やな感じね、あの人」
「でも、同じ声楽なんでしょ？」
「みたい。あの人、結構キンキンした高い声してたわ。わたしはあなたと同じリリックな声なの。覚えてない？　試験の時」
「ああ……いいえ……ごめんなさい。覚えてない。わたし、必死だったから……」
「わたしは覚えているわよ、あなたのこと」
「あら？　ありがとう」
友里菜はどこか嬉しくなった。

それから二人は、配られた資料を基に、何の科目を選択すべきかあれこれ思案していた。その内にクラス中の生徒達が集まってきて、あれこれ喋くり始めた。
その響きはざわざわした柔らかいトーンで、どこにも低いだみ声は無く、ここが女子大である事を思い出させてしまう。
時々、重そうなコントラバスを運んで来る生徒や、如何にも高そうなバイオリンケースを持って、にぎにぎしくやって来る生徒も居

たが、全てが女子ばかりであることが、友里菜には不思議に感じる。
暫くすると、自然にグループが出来ていた。不思議な事だが、それがごくごく自然になのだ。友里菜と会津から来たと言う響子は、ふと気付くともう二人の声楽の女子達と一緒になって、ぺちゃくちゃとお喋りしていたのだ。
「もう直ぐ礼拝の時間だって！　それからは自由時間で、明日までに選択して登録しなくちゃ」
と小柄な女子が甲高い声で言った。

「それにしても、広いキャンパス！　ここね～、英文と社会学部の教養は無いんだって。別の場所らしいよぉ」と福岡から来たと言う女子が囁いた。
「もう一つのキャンパスは、ちょっと遠いよね～」
と響子も相槌を打つ。「わたしは、ここのキャンパス内の寮に居るんだ」
「東寮？　それとも、西寮？」
「東」と響子は短く答える。「門限は１０時だって」
「はー、今時１０時なんて、コンサートはどうするよ」
「その時は、寮長に予め外出許可を提出するのよ」
「わー、なんか修道院じゃん、まるで」
「だって……修道院でしょ？　この雰囲気って」
「わはははは。言えてる言えてる」
女子達のお喋りは果てしなく続くように、友里菜には思われた。そしていつの間にか、自分もそのお喋りに加わっているのだ。不思議な感覚だった。今までに味わった事の無いような、奇妙な感じ……。
これが女子大なのか……。男の陰が無く、屈託が無い、そんな雰囲気。友里菜はそう思うと、ふっと微笑んだ。そうか、これが女子大なんだと。

4　地獄への扉？

4　地獄への扉？

医学部コースは国語や地歴はない。英数理、それも理科の内二科目を選択しなければならないのだ。地歴が好きだった芳人は、何か割り切れないものを感じていた。その上、予備校は過酷を極め、5月を待たず、すぐにへとへとになった。

それは淳平も同じ様子だった。

ある日、予備校が終わった後、二人はふらりとマクドに寄って、今まで溜め込んでいた愚痴を散々言い合った。

「あ～あ、僕ら20歳になったら、思い切り酒を飲み明かしたいがな、な、淳平」

「どーも予備校の奴ら、好きになれへんなぁ」と淳平もぶーたれた。

「女断ち、遊び絶ち、か。あ、それからゲームも！　もぅお、それやったら人生楽しみなんか、何もないやんか」

「“欲しがりません、勝つまでは！”やで、芳人」

そう言うと、小柄な淳平はハンバーガーに喰らいついた。華奢なのにも係らず、案外淳平は痩せの大食いなのだ。

「ああ、腹減ったな～。けど、なんか味気ない」

と芳人は愚痴る。

「そう言えば芳人、カノジョの方が先に大学卒業するけど、大丈夫かぁ？」

「何が大丈夫かぁ、やねん？」

「先にカノジョが大人になって、もうお前を待つのがやになって、て言うか、痺れ切らしてもうて、“もう、あんたなんか待てへんわ”って言われるんとちゃう？」

「うん、それが問題やな」と芳人は妙に同意した。
「以前は、友里菜の方が子供っぽいと思っていたけど、なんせ女子大になんか行ってもうたら、もうすっかり大人びて、僕みたいのには相手にされんかも」
「心配か、芳人」
「ああ、ちょっぴりね」
「大丈夫やて。医者になったら、女の子達がわんさと寄って来るって」
「そんな簡単なもんや無いと、僕は思うんやけどな～」
「確かにね」と淳平は、急に大人びた顔付きになって相槌を打った。
「親父なんか見ていると、ほんま大変やもん。お袋なんか、医者と結婚したから、遊んで暮らせると勘違いしてたんやって。けど、ほんまは物凄く大変で、朝は早いし夜は遅いし、若い頃は週一ぐらいで当直があって、家には帰れんかったし。騙された、と言うてた」
「ははは！　それはとんだこっちゃ」と芳人は嗤った。
「親父さんは、確か内科？　外科？」
「本当は外科。あんな、医学部では成績のいい奴は内科、ボーっとしている奴が外科なんやて。テレビでやるんは、ほとんど外科医がむず～い手術をパッパッとやってカッコよさそうやけど、ほんまは違うんや。外科はほんま、大変やで。せやから親父は、僕に絶対に産婦人科と外科にはなるなって」
「そんなもん？」と芳人は二つ目のハンバーガーを食べながら聞く。
「僕んちには、医者はおらんからなぁ」
「芳人は純粋やな」
「なんやて？」
「純粋なんや。羨ましいほど。僕んちは、親父の跡を継げとかそういうしがらみがあるけど、お前は純粋に医者になりたいって思った。

それも、病気のオカンを見てそう志望したんや。僕から見たら、ほんま立派や」
　それから淳平はニタリと嗤った。
「けど、いつか後悔するでぇ。僕は他の職業になりたかったな」

「後悔する？」
「うん、まじで」
「そうかなぁ。医者は大変そうやけど、人の命を救うんやで」
「けど、助からへん患者の方もぎょうさん居るんや。そういう患者さんの最後を看取るのも、医者やで。坊さんは、全てが終わってからあとから来るだけや、といつも親父はブツクサ言っとるけど、それはほんまや」
「う～ん、因果な商売やな～」
「その上、あんまり休みも取れへん」
「そうかもな」
「お袋なんか、いつか暇になったら、二人で世界一周の船旅しようと、いつも言ってるけど、それが実現できるかどうかも分からへん」

「おいっ、淳平。そんなん知ってんのに、なんでお前も医者になるねん？」
「うん……それはやな～」と淳平は一瞬口ごもった。「やっぱ、親父を尊敬してるっちゅーかな」
「へええ？」と芳人は淳平の顔をまじまじと見つめた。
「地獄を天国に変えたいっていうかな～」
「お前、結構まじやんか」
「ん、まぁそうかもな。そうでないと、この地獄の特訓なんか毎日出来へんわ」
　淳平は、へへへっと照れ笑いした。芳人は淳平の本心を知って、心から嬉しいと感じた。二人は幸せそうに、ハンバーガーを食べ続けた。夢だけが、二人を優しく包んでいく。

5　正しいお化粧の方法？

5　正しいお化粧の方法？

友里菜はやっと選択科目を決めて提出した。

ある昼休み、

「へー、キリスト教学って、一、二年は必須科目なんだ～」

と友里菜が呟いていると、

「そうよ」と有紀が当たり前のように横から言った。「わたし、高校はカトリックだったからね～、夏休みとかは必ずどこかの教会の礼拝に出なきゃなんなかったのよ。もううざくてさ。けど、結構新鮮だったけど」

「そうそ、あたしのところもそうだった」

と福岡から来たという、末松規子も相槌を打った。

「そうなのか～」と友里菜は新しい発見をする。「わたしの高校は府立だから……夏休みでも何も無かったし」

「その点、公立はお気楽よね」と有紀。嫌味ではないのだが、どこか高慢ちきな響きを持つのが欠点と言えば欠点の有紀だ。

「ん、まぁね」と友里菜はいい加減に答えると、近寄って来た響子と一緒に食堂に出かけた。

この頃では、自然とグループが出来ていた。地方出身の女子と、在京の女子達。そして声楽、ピアノ、バイオリン、管楽器、作曲理論、という各科でも又グループがあり、女子達は大抵はどこかのグループと行動しているようになっていた。

友里菜は地方出身の声楽グループに属してはいたが、それも何となくだった。いつも顔を合わせるし、先生達との共通点も多いからだ。

友里菜と有紀は、佐藤教授の担任の生徒になった。ソプラノの佐藤教授は、もう６０ぐらいの年配で、ここではかなり上の方だと言う。受験前にお世話になっていた山際冴子はその佐藤教授の弟子で、まだ助教授だったのだ。
「良かったわね、あの先生になって。それって有望と言う証拠なのよ」と冴子は言うと、ニッコリと友里菜に微笑んだ。

けれどもやはり友里菜は最初のレッスンで緊張してしまい、余り巧く声が出ないでいた。
「レッスンには時間通り来る事。そしてちゃんと予習してきてちょうだい」
と佐藤教授はだみ声で言った。地声はそうなのだが、実際に歌い出すと全然違う甲高い声だ。その上、いつも髪の手入れが行き届いており、今時珍しくアップにしている。
「それともう一つ。服装や身なりはきちんとしておくこと。絶対に今時のジーンズでは、あたしはレッスン致しませんからね」
言葉は柔らかいものの、その声音は恐ろしく響いた。

「って言われちゃった、わたし」と友里菜が響子に言うと、
「当たり前だよ。当然っ！」と意外にも響子が同意したのだ。
「え、なぜ？　今時、そんな服装まで言われるのって変やない？」
「柿沢さ～ん、わたし達声楽する学生がどんなものかって、気付いていないんじゃない？」
と響子は甘えたような、又拗ねたような言葉を並べた。
「それってどういう意味？」
「歌を歌うのってね～、観客の正面に立つでしょ？　その時に観客は、歌の中に夢や美や愛を感じていくの」
「何か……むずい～」

響子はあ～あと溜息を付いた。
「わたしさぁ、会津では一、二を争うブチックでいつも服を買ってたのよ」
「はぁぁ？」
確かに響子は開業医の娘で、お金は有り余るほど有りそうだったが……。けれどもそれが？
「つまりさぁ」と響子はじれったそうに言い始めた。「柿沢さ～ん、あんたってさ、どっかダサくない？」
「ダサい！？」
それはショッキングな言葉だった。なぜなら、芳人も隼人も自分に向かってそんなことは言わなかったからだ。
―　随分、失礼じゃんそれって。
「清楚なのはいいけどさぁ、もっと女っぽくめかし込んだほうがいいと思うのよ。元々、素材がいいんだから、もったいなくない？」
「素材がいい……！？」
「そうよ。今度わたしと一緒にお化粧品とか服とか買いに行かない？　渋谷とか、六本木とか銀座とか。そうそ、原宿はダメ。あそこはおのぼりのガキが一杯だから」
と響子は自分も地方出身なのに、そうのたまった。
「で、お化粧方法とか教えてあげる。あんたオンナをあげなくちゃダメでしょ。せっかく青春しているのに」
「余り派手なのは、大阪のカレシが嫌がる」
「あら！　柿沢さ～ん、カレシがもう居たんだ！」
と響子は素っ頓狂な声を張り上げた。
「そんなに大きな声で言わないでよっ！」
「分かった分かった。そっかー、もう居たか～。でもだったらもっ

ともっと美しくなりたくない？」
「でもさ、お金が……」
「そんなもん！　テクニックよ、テクニック」
「あなた達、そんなことよりも、今年度からパソコンに教授達がスケジュールを送信するって言ってたわよ。ちゃんとパソコン動いてんの？」
と突然横から声を掛けたのは、なんと有紀だった。有紀は重そうなノートパソコンを持っていたが、それを見て、友里菜も父から譲り受けたお古のＷＩＮＤＯＷＳ９８のパソコンを思い出していた。
―　そや！　わたし……勉強しに、大学に入ったんやなかった？
それなのに、正しいお化粧方法なんて！　けどやっぱり気になる。
わたしのお化粧って、ダサいのかな～。
つまらないことで日々思い悩む友里菜だったのだ。

6　初合コン

6　初合コン

五月生まれの友里菜には、“五月病”というものは無い。けれども、その頃には何人かの学生達が“五月病”らしきものに掛かっていたのだ。

ちょうどその頃に、ＧＷと言う連休のおかげで、一部の生徒は実家にしばし戻り、そしてそうでない学生達は青春を謳歌することになる。

友里菜は大阪の実家には戻らなかった。

友里菜の母の妹である村越歩（むらこしあゆみ）の家に下宿していた友里菜は、歩が少し苛々している事に気付かなかった。鈍感と言えばそれまでだが、子供の居ない夫婦にとって、ふいに下宿人が増えるというのは、例えそれが甥や姪であっても、うざいものなのだ。

けれども叔母の歩も、そうだとは姉の娘に向っては言い辛い。

「ねぇ友里ちゃん」とある日歩は囁いた。

「はい、何でしょう？」とピアノを弾いたばかりの友里菜が、無邪気に問うので、ついつい歩は言いそびれてしまう。

「あなた……もちろん連休には大阪に戻るのよね？」

「はぁ？　いいえ、戻りません」

「え、そう？」と歩は動揺と失望を押し隠しながら、さり気なさを装う。

「あ！　わたし、お邪魔ですか？」

「い、いえ、そんなことないのよ。別に……」

けれども歩の狼狽振りは、さすがの友里菜にも分かった。歩叔母はいい人なのだが、やはり友里菜が居ると荷が重いのだろうか……。

「叔母さん？　どこかへ行きたいのなら、わたしに構わなくっていいんですよぉ」
「いいえ、そうじゃなくて……」
「わたしもわたしで、合コンに誘われているんで。だからちょくちょく出かけるし」
「そうなの？　じゃあ楽しんできてね」と歩はやっと静かに微笑んだ。

それはあながち嘘ではなかった。実は友里菜は、二つの合コンに誘われていたのだ。芳人というカレシが大阪に居る身としては、そう簡単に受けたくなかったというのに、友里菜は生返事をしていたのだった。
まして歩がそういう気持ちなのなら、尚更自分は合コンに行かなくてはならない、それは義務なのだと友里菜は考え、直ぐにそれを、一つの合コンの言い出しっぺの末松規子に電話した。
それから次に、数日前に入部した『美術クラブ』の部長、有吉美央（みお）にも連絡したのだった。

どちらも、友里菜が承知するとは思っていなかったらしい。どちらもびっくりしていたが、反面喜んでもいた。
「あ、友里菜〜（今では、友里菜は名前で呼ばれていた）、本当にいいの？　大阪帰らなくて。カレシ、居るんでしょ？　会いたくない？」と規子が念を押すと、
「会いたいけど、戻ってもあっちは勉強とかテストばかりでわたしと会う暇なんか無いわよ、のりっち（規子は今ではこう呼ばれていた！？）」
「そっかー、カレシってまだ予備校生だったんだよね」
「のりっちは博多に帰らないの？」
「うん、戻らんと（＝戻らないの）。遠いしさ、別にいいもん。そ

れよか、いいカレシをこっちで見つけんとね」
「ま、わたしはただ出るだけだよ」
「それでいいよ、友里菜は。ただ花を添えてくれるだけで。でもぅ……もしかしていい人が出てきたらどうする？」
「そんな人、居ないよ」
「はいはい、分かりましたよ。又のろけられた～」
とのりっちこと規子は言うと、ピッチを切った。

規子がアレンジした合コンの翌日は、『美術クラブ』の合コンで、結構忙しかったが、友里菜はルンルンしていた。叔母の家にだらだらとは居られないという思いがあり、やはりなるだけ外に出たかったのだ。
「S大学の美術部だよ～、柿沢さんっ！　出ない手は無いわよ。みんなイケメン揃いって言う話だから」
「って、あのぅ、有吉さん、会ったことあるんですか？」
「それが……ない」と美央はあっさりのたまった。

「だってそれじゃ……」
「天下のS大学だよぉ。イケメンばっかりに決まってるじゃん、とあたしはそう聞いた」
美央の言い方はどうもいい加減だ。けれども友里菜はどうでも良かった。芳人よりいい人がいるはずが無い、と友里菜はその時までそう思っていたからだ。
「まあ、聞いただけならなんとでも言えますよね～。でも行きます」
「それでこそ、我が後輩だよ～」と美央は朗らかに言った。女の園では、先輩後輩はしっかり守られてはいるものの、どこかほんわかムードが常に漂っていて、その点についても友里菜は新鮮だったのだ。

その頃、大阪では……。

「ハ、ハ、ハックショ～ン！！」と騒々しく芳人がクシャミをし、鬼の高橋先生にジロリと睨まれていたのだった。
「おいおい芳人ぉ、今頃風邪？」
と淳平が囁く。
「いや、ちゃうけどなぁ」
「だったら……あれか？　カノジョが浮気してるとかぁ？」
「まっさか」

「おいっ、そこの羽島と大久保。何こそこそ言ってんのや！　私語を慎め！　今は勉強だけや～～！　分かったな！」と高橋先生の怒鳴り声が予備校の教室に響いた。
「はい、分かりました」
「はい、以後気をつけます」
と同時に二人は謝る。どうやら、大阪の春はまだまだずーーっと先のようだ……。

7　数々の出会い

7　数々の出会い

五月の連休のある日、クラスメートの末松規子、通称“のりっち”に誘われた合コンが渋谷であった。

友里菜とのりっち、そしてもう一人フルート科の本庄アンナの三人が、予定されていたビルの三階の会場に入ると、そこは既に学生と思しき若者達で超満員だった。

「な～んだ！　この混雑ってなによ！」とアンナは、呆れたように友里菜に囁くが、喧騒で聞こえない。

「立食パーティとは聞いていたけど、こんなに大勢だとは……」

とのりっちも躊躇いがちだ。

「ざっと見て、大したイケメン居ないじゃん」

「でも、アンナ、ここにいる男子はみんな東京六大学か、それに準じる男子達ばかりなんだってよぉ」

「……のようには見えないじゃん」とあくまでもアンナはおかんむりだ。本庄アンナは、両親ともクリスチャンなので、聖書から名前を付けられたらしいが、本人は迷惑がっていた。おまけにアンナは都内に暮らしている、生粋の“お嬢様”だったし、見た目もファッションもお嬢様ルックで固めているのだ。

それに反して、友里菜は申し訳程度の黒のプルオーバーに白のティアードスカート、そして、のりっちは、超ど派手な花柄模様の服だ。

三人は勝手が分からずウロウロしていた。

「ねぇねぇカノジョ達ぃ」と言う浮ついた声で振り返ると、同じく三人の男子が立っており、その内眼鏡を掛けた一人が呼びかけたの

だ。

「はい？　なんでしょ」とのりっち。

「君達……どこの大学？　てか、ひよっとして女子大？」

「ええ、わたし達、横浜のＦ女子大の音楽学部」

「ひぇ～っ、音楽やってんの？　もち、クラシックだよね～」

ともう一人が背後から口を差し挟んだ。

「当たり前じゃん」とアンナは不機嫌そうに答える。「Ｆ女子大が、演歌とかポップとかやると思う？」

「いゃあ、すみませ～ん」とその男子は軽～く受け流した。

「僕ら、Ｋ大学なんっす。一緒になんか話しません？」

「Ｋ大学かぁ」とのりっちは、あとの二人に目配せして、顔を寄せた。

「ねえねえＫ大学って、まあ良くない？　一緒になんか喋ったりする？」

「もうこいつらに決めるの？」とプライドの高いアンナは不服だ。

「Ｔ大とか、Ｔ工大とか、Ｓ大とか居ないの？」

「さぁね……でもとりあえず、Ｋ大ならいいんじゃない？　ねぇ、友里菜、どう思う？」

とのりっちは友里菜に振った。

「さぁ、わたしは誰でもいいけど……」

その言葉は本当だった。目の前の、如何にもお坊ちゃん風のＫ大生達を見ても、可も無く不可もないという感じだったのだ。

「じゃあ、決まり。彼らと喋って、面白くなかったら他の男子にしようよ」

そう言うと、さっさとのりっちはその男子三人と交渉し始めた。

「なによぉ、もうＫ大でウキウキなんだから、のりっちは。だ～か～ら～、地方出身の女子は、Ｋ大とかにもう直ぐめろめろになっち

ゃうんだ」
とアンナは不満そうに、友里菜に囁いた。
「あの……わたしも地方出身だけど」
「あら？　関西は違うわよ。特に京都とかはさ～。時々京都に行くけど、歴史があるじゃん、歴史が。悔しいけど、江戸よりもね」
「は、はぁぁぁぁ？」と友里菜はもう一つ、アンナの精神構造が読めない。
「それに、友里菜ってセンスいいもの。大阪にしては、さ。関西訛りも少ないしぃ」
「はあ……」
友里菜は何と答えていいか分からない。

とにかくこちらの三人と、K大学の三人は丸いテーブルを囲んで互いに座った。
友里菜の目の前には、少し大人しそうな小柄な男子が座っていたが、その男子はチラチラと友里菜を見つめている。
「あのぅ」と二人は同時に言い出した。
「あ、お先にどうぞ」と友里菜が促すと、その男子は思いがけないことを言い出した。
「僕、名前は大滝洋平。太平洋の洋に平らと書いて、洋平。実は関西から来たんです。姫路から。知ってます？　あの、柿沢さんでしたっけ、貴方も関西から来たんですよね」
「ええ？　どうして分かるの？　もちろん、姫路は知ってるけど。一度姫路城にも行ったしね～」
「やっぱり！　なんかね、臭うんですよね～。それに微かに訛りがあって。いや……微かに、ですよ。柿沢さんって、ほとんど標準語だから」
「標準語って言い方、好きになれへん」と思わず友里菜は言ってから、恥ずかしそうに俯いた。

「あ、言っちゃった」
「良いんじゃないっすか。僕、そういう響き、懐かしいんで」
「大滝さんって、現役？」
「あ、僕？　僕は実は2年生」
「二回生か」
「その言い方、関西らしい」

「え？　そうなのぉ」
「僕は、いっこ上ですね～」
「いっこ？　ああ、一年学年上ってことね」
「慣れないの？」
「そう簡単には慣れませんよぉ」と友里菜は答えてから、くすりと嗤った。相手が関西人なので、どこか緊張感が消えていくのだ。大滝の見た目はおせじでもイケメンではなかったが、けれどもどこか人懐っこい穏やかな雰囲気の男子だ。
ふと見ると、あとの二人もいつの間にかペアになっていた。

「ここ、東京私大連合のパーティなんっす」と大滝が言うと、隣で座っていた地獄耳のアンナが、溜息を付いた。
「な～んだ、国公立大生は居ないのかぁ」
「済みませんねぇ」と不敵な感じの男子が言った。「けど、俺は都内っすよ」
「あら、そうなのぉ！？」と嬌声を上げるアンナ。「あたしもよ！」
「みんな、結構上手くペアってるじゃん」とのりっちが言った。
「なんか、三人、上手く行ってますよね～」と最初の眼鏡の男子が相槌を打った。
「皆さん、結構イケテルし」
「まあっ。冗談が上手いわねぇ。うふふふふ」とのりっちが一番乗っている感じだった。

こうして最初の合コンは、まあまあ成功だった。この六人は、夜更けまで語り合ったり、飲み食いを始めたのだった。

8　またまた、出会いが・・・

8　またまた、出会いが…

初めての合コンがかなり遅くなっていたのだが、友里菜は翌日のもう一つの合コンに出る為に、大滝に謝って先に戻った。

けれども自室へ戻ると、どど～っと疲れが出て、パジャマにも着替えずベッドで爆睡してしまったのだ。

翌日の合コンは夕方からだったので、友里菜はだらしなく一日を過ごし、結局日課にしている練習は何一つ出来なかった。

クラシック音楽演奏は、一日でも怠るとやはり自分で分かるほど、下手になる。やればやるほど、演奏という物はレベルアップしていくのだ。

友里菜が欠伸をしていると、ケータイが掛かってきた。芳人かと思ったが、アンナだ。

「ふぁ～い、アンナ？」

「なによぉ、寝てたの？　もう疲れた？」

「うん……まぁね……」

「どうよ、昨日は？」

「ん、まぁ……メールの交換はしたけど、別にぃ」

「でしょ？　なのにさ、のりっちったら、もうあいつに決めたっぽいよ」

「え？　カレシにとか？」

「うん。のりっちって、案外望みが低いんだ～」

「じゃなくって、一人で淋しいんじゃ？」

「気が合ったみたいで、二人であのあとしけこんだ」

「なのぉ！？　うっそー？」

「そこまでは知らないけど、結構いちゃいちゃしてたし」

アンナの話は長くなりそうだったので、友里菜は早々に切り上げた。
「あ、わたし……今日も別の合コンがあるんで」
アンナは絶句したらしい。
「はぁ……友里菜ってやるね～。一見楚々としてるのにさ」
「美術部の先輩に言われちゃたし、お付き合いで」
「なの？　ほんと？　人は見かけに寄らないって言うけど。あたしはちゃんとフルートの練習してんのよぉ」
「じゃね」
そう言って、友里菜は切った。

「確かに面倒臭い」
そう呟くと、友里菜は洋服を選び始めた。さすがに昨日と同じ服はまずいだろう。そう考えると、咄嗟に最近買ったピタリとしたボディコンのミニの服を手に取った。
「あら？　今日もお出かけ？」と歩が玄関口で聞くので、友里菜は曖昧に答えた。
「うん、ちょっと」
「昨晩は、少し遅かったんじゃない？」
「ああ。ええっと……今日はもっと早めにしまーす」
「若い娘だから、それなりにちゃんとしてよね」
と歩が言う。ゆったりとだが、どこかきつく感じるのは、浜っ子特有の醒めた言い方だからだろうか？

この日は六本木だった。電車では、友里菜は居眠りしていた。
けれども、有吉美央の姿を見つけると目が覚めた。美央は、本当にパーティに臨むかのような、派手なスパンコールの付いた透けた服を着てきたからだ。美央の側には、友里菜と同じ一年生二人が立っていた。一人は普段着にジーンズ、もう一人は自分で縫ったかの

ような個性的な服で、髪が異様に長い。

「遅かったじゃない！」と美央が言うと、友里菜はペコリとお辞儀をした。

「済みません。昨日も……だったんで」

「あら、お盛んね～、宮本さんって見かけに寄らず」

と美央はアンナと同じような事を言う。

「でも、宮本さんって案外派手なんかも」と一年生の一人、地味な方が言った。「だってその服、結構目立つよね」

「じゃ行こ」と美央は後輩を促した。

「今日は少人数よ。A学院大の美術部の野郎達だってさ。行く所もサテンに毛が生えたようなところで。でもそっちの方が気楽でいいでしょ」

「A学院大ですかぁ」と一人が叫んだ。「垢抜けてる男子が多いのかな～」

「そう聞くよね」ともう一人も同意した。

「いい男子が居るといいけどね」と美央は冷静だ。

約束の場所の六本木の、確かにどこか玄人っぽい飾りのサテンの扉を開けると、そこは又昨日とは違う雰囲気、違うメンツが座っている。少し薄暗い。

「あ、有吉さ～ん」と一人の男子が立ち上がった。「ここ、ここ」

「ごめんね、遅くなって」と美央は大して遅れてもいないのに、そう謝った。奥には6人の男子が座り、じっとこちらを伺っている。どの男子も同じに見えたのは気のせいだろうか……。とにかく全員雰囲気が同一なのだ。大学のカラーなのかも知れないが。

今この瞬間の友里菜には、芳人に対する“罪悪感”というものが欠落していた。芳人はなぜか遠い存在でしかなく、ちょっとした空白期間や距離というものが、如何に二人の間の支障になっているか、

気付いていないほどに。

ふと友里菜は一人の男子の視線が、自分だけに注がれているのに気付いた。自分だけに……それが何を意味するか、友里菜にはピンときた。友里菜もそっと伺うと、その男子と目が合う。爽やかで痩身の男子が、ふっと微笑んだ。

―　また、……出会っちゃった。どうしよう。

それは微かな喜びと驚きを秘めたパニックだった。

9　妖艶な従姉

9　妖艶な従姉

ツーツーツーとケータイは無情に鳴っているだけ。けれども友里菜は出ない。

「ちぇっ、なにしてんねん、友里菜は？　最近、あっちからも何の連絡も無いやんか」

腹立たしげに芳人はケータイを切った。メールを出しても、そんなにレスは無い。パケットの無い時代なので、しげしげと出せないのが、尚更シャクだ。

「なんや、芳人、カノジョのこと怒っているんか？」と電車の隣に立っていた淳平が冷やかした。

「べ、別に怒ってなんかいないけど……」

「ほんま？」と淳平は更に小突く。「ほらほらほらぁ、顔が赤くなってるぞ、芳人。カノジョのこと信じられへんのん？」

「そりゃ……信じてるよ。けど、遠い所やからなぁ。この連休にも帰ってきぃへんし」

「やっぱり……疑ってんのやな。けどしゃーないよ。僕ら、まだ予備校生やし。お前が医学生になったら、カノジョも又振り返るって！」

「変な慰めはやめてんか」

「むふふふ……」と淳平は意味深な笑いを浮かべながら、「じゃ」と言って手前の駅で降りた。

何だかもやもやした思いを抱きつつ家の玄関扉を開けると、そこには麗々しい女性の高いヒールのサンダルがあった。（＊当時、流行っていました）

「あれ？　誰や？」
不思議に思いながら居間に入ると、そこには見慣れぬ若い女性がソファに座って、母親と笑いあっている。
「誰や……？」と芳人はつぶやく。

「あ、芳人か。美里（みさと）ちゃんが来てくれはったで」
「美里ちゃん？　……あ、従姉の美里ちゃんのこと？」
「当たり前やんか。従姉に美里って子は、一人しかおらんがな」
と母親は手を口に当てて笑う。その時、後姿だった美里が振り返った。

「あ、芳（よし）ちゃん？　久し振りやね」
芳人は美里を見た瞬間、ハッと身を強張らせた。その余りの変化に、そのろうたけた妖艶な娘が、よもや自分の従姉だったとは信じられなかったのだ。
「な、兄さんがしばらく関東に居たけど、戻って来はってん」
「そうよ。最近越して来た。今は山崎に居るわ。又よろしゅうな」
「あ……はいぃ」
「なにボーっとしてんねん、芳人は。あ、分かった。美里ちゃんが余りにも別嬪さんになったさかい、びっくりしてんねんやろ？　何しろ、前に会ったんは……」
「もう7年前やよ、叔母さん」と美里は微笑んだ。「ちょうど芳君が……まだ小六やったから」
「そやね～。時の経つのは、ほんま早いわ」と母親は感慨深そうに相槌を打つ。
「それがね～、あの小学生が今では医大の予備校生なんて！　あの頃、芳君って結構ゴンタやったさかい」
「中学では、それこそ不良一歩手前やったし。心配したけど」
「それが立派になったわねぇ」

年上の従姉の艶っぽさに、思わず芳人はくらくらしてしまう。さっきまで友里菜の事ばかり考えていたのに、友里菜は到底この従姉の色っぽさには叶わないと確信する自分が居た。
昔芳人が見ていた美里は、少し年上の高校生のお姉ちゃんって感じだった。確かに側に来るとどぎまぎしたが、所詮親戚。“女”として見ていた訳ではなく、又美里から見ると芳人は“ただのガキに過ぎない従弟”だったはずだ。
けれども美里は芳人よりもう五つ上の成熟した娘であり、幾ら親戚と言えど、今度は違った意味でどぎまぎしてしまう。

―　いかん、いかん！　従姉に変な感情を抱くとは！　僕としたことが、なんてこった。

けれども芳人のジュニアは奇妙にそそり立っていた。芳人は慌てて、
「あ、自室に行く～」と叫ぶと、階段を上っていった。
「芳人～！　もう直ぐ夕飯やで！　一緒に食べよ～な」
と階下から母親の声がしたが、芳人は自室で胸を上下させていた。
「あ！　分かった！」

芳人はどっとベッドに大の字になって倒れ込んだ。

―　女は怖い～。たったちょっとの間に、ああまでも変化してしまう。蛹が蝶になったように……違う、そういう陳腐な表現じゃなくって！　ただのお姉ちゃんが、妖しいオンナへと憑依するんや～。ああ、こわぁぁ。
まっさか、友里菜……あっちでこういう風に変化してんのとちゃうやろか……。

芳人が要らぬ妄想に懊悩していた時、ドアが突然開いた。

「あ、芳君。寝てたん？」と言う声は……美里！　芳人は、こうして寝ながら見上げると、美里はスタイルも抜群だという事が分かった。それは、親戚として誇らしくもあるが……しかし。
「ああ、いやいや。別に。ただちょっと疲れてもうて」
「予備校生は辛いよなぁ」
そう言うと、美里は臆面も無く少しずつ近寄って来たのだった。

10　誘惑？

１０　誘惑？

「芳君……あんた、結構いけてるやんか。背も伸びたし、昔よりぐっと品よくなったし。昔はアホかと思ってたけど、雅君に似て結構秀才になったんやなぁ。Ｉ高と言ったら、この辺では有名校やん」

美里はずかずかと入って来ると、芳人が横になっているベッドの真ん中に座った。形のいいお尻が、いまや芳人の目の前だ。

―　うわぁぁ！　目の毒やがな～。

芳人は煩悶していた。けれどもそんなこととは露知らず、美里は昔のように親しげに、と言うか、ため口でポンポン言いたい事を言ってくる。

「雅君はＫ大、あんたが医大に入るなんて、叔母さんも幸せもんやわ」

「まだ入ってへんやん」と芳人は子ども扱いされて、仏頂面で答えた。

「あはは、そやな～」と屈託無く美里は笑う。

「それにあんたが医学部志望なんて、ほんま驚いたわ」

「いや……それはやね～」

「分かってるって。叔母さんの病気が原因やろ？」

「いや、それだけやないけどな」

芳人は焦った。

「そんなことより、美里ちゃん……いや、なんや～、ちゃん付けするのんも、変やなぁ」

「べつにぃ。ちゃんでもかまへん」
「美里……さ・ん・は」
「あはははは。さんって言われるのも、むずむずするな～」
「美里さんは、今何してるん？　確か、東京の大学に進学したと聞いたけどな。あっちで就職してたんとちゃうん？」
「いい、ポイントや」と美里は言った。「就職した。航空会社」
「わぁ！　スッチー！？」
「アテンダント、と言ってや。けど、辞めた」
「はぁ？」
芳人はやっと起き上がった。

「なんで？　いい仕事とちゃうん？」
「わたしには向いてへんかったみたい。てか……身体壊して、やめちゃった」
「え？　そうなん？　知らんかったわ」
「結構きついねんで……その、スッチーて仕事はさ」
と美里は静かに言う。「もともと両親の希望やったんたやわ。両親の時代は、スッチーて言うのはさ、高給取りやし憧れの的やったんやて。特にあたしの母なんかは、なりたかったて言うてた。
でも自分の夢を娘に託した頃は、もう時代が違っててん。フライト・アテンダントなんて、ただのホステスやんか。飲み物注いだり、難癖つける客をなだめたり……あたしね、一日に2回東京と福岡を往復してたんよ。そやのに、それほど給料はよくなくってさ。おまけに身体壊してしもうて」
美里は俯いて、足を組んだ。芳人から見ると、美里のTシャツのデコルテから胸のふくらみがよく見えてしまうのだ。

―　わーー、あかん、あかんって。美里ちゃん。それってあかんわ！　……って、何興奮してんねん、俺？

美里はふと顔を挙げると、芳人の方を見つめた。その目が色っぽい。
「でね……辞めた」
「そっかー」
「芳君、連休中もどこにも行かへんの？」
「あ……いや。だって、塾、あるしぃ」
「その前とか、後では時間無いん？　あ、そうかぁ。芳君、カノジョが居てたんや～」
「居るけど……でもあいつ、関東や」
「帰ってきぃへんの？」
「うん」
そう答える芳人も急に淋しくなっていく。

「どっか、あたしと行くかぁ、芳君？」
「ええっーーーーっ！？」と芳人は素っ頓狂な声を出したものの、直ぐに「ま、いいかな」と呟いていた。
「たまには、年上の従姉と一緒もええやろ？　奢ってやるからぁ」
「うん」
「じゃ明日」
「明日！？」
「あかん？」
「ええっと……塾帰りじゃだめ？　五時ごろ」
「ええよ。北新地で何か美味しいもんでも食べようかな～」
「ええっと、焼肉？」
「ほんま、雰囲気ないなぁ～、芳君は。分かった。梅田でなんかいいもん。フレンチ、おごってやるさかい」
「いいのん？」
「ああ、任しときって。こう見えても、結構貯金してるからさ」
「うん、分かった！」
なぜかウキウキしている自分がいるのに、芳人は驚いていた。

11　美術部のプリンス

11　美術部のプリンス

友里菜は昨日の合コンを思い浮かべていた。自然と、笑みがこぼれてしまう。それも我ながらちょっといやらしい笑みなのだ。にひひと言った感じの笑み……。

昨日のA学院大学美術部との合コンは、おおむね上手く行ったような気がする。友里菜に視線を注いでいた男子は同じく一年生。けれども、年齢は一つ上だった。

気障というのではない、そして偉ぶっているわけでもない。それなのに、その男子にはどこと無くオーラがあった。芳人とは違う、色白のイケメンだ。

その男子は明らかに友里菜に一番興味を抱いたようだ。それなのに、ただ微笑んでいるだけで、一向に自分からは言いかけない。

自己紹介の後、一人がその男子を突いた。

「おいっ、仲本、何か言えよぉ」

「そうだよ、将来の“美術部”を背負って立つ逸材だろ？　ほんと、美大にでも行けば良かったのになぁ、仲本」

「てか……美術部のプリンスだよな、仲本は」

「いやぁ……“プリンス”には参ったなぁ。氷川清じゃないんだから」

仲本というその男子は、意外なことを言ったので、友里菜はちょっと驚いた。外見では、とても演歌のプリンスの名を言うようには見えなかったからだ。

「僕は……江戸っ子だけど……下町だし」

「葛飾柴又！」と質素、悪く言えばダサい服装の方が叫んだ。

「ん？　いや……寅さんじゃないんだから」と仲本ははにかむ。と言うより、友里菜には、少し気分を害したのを、何とかして面に出すまいと努力しているなという気がした。
「そうよ！　将来のＡ学院大のプリンスに向って言う事じゃないわよ」
と美央がたしなめた。「わたし達、Ｆ女学院は、そんな言い方はしないものよ」
「あ、はいぃぃぃ」とその女子は小さくなる。

「仲本さん、下の名前は？」
「あ」と仲本は、お目当ての友里菜からそう尋ねられて、しばし戸惑っていた。
「ひろゆき……寛容の寛に、之（これ）っていう字で、寛之（ひろゆき）。分かる？」
「ええ、分かるわよ。わたしは友里菜」
「ゆりな……いい響きだね」
そのソフトな言い方や物腰は、とても下町出とは思えない。

けれども結局二人だけで話したのはそこまでで、又みんなでがやがやと喋り始めた。最初はこういうものだろうと、友里菜は合コンの雰囲気を感じていたし、お互いに深入りをしなかったのだ。
そして夜も更けぬ前に、解散になった。
「残念っ」と例の地味な女子が帰宅途中で呟いた。「いいのが居たのに……わたしには目もくれないんだから」
「仕方ないじゃない。あなたが“葛飾柴又”な～んて言うからよ。幾らなんでも、寅さんは無いでしょ、寅さんは」
と美央がやんわりと叱りつける。

「その点、柿沢さんは凄いわね！　男子の心情を上手く見てるわ」
「でもあの男子、なんか分かりにくいですよね」
と長い黒髪の女子が付け加えた。「プリンスなんだか、下町のお兄

さんだかわけ分かんない」
「確かに」と美央も同意した。「ま、今回はだれもメアドゲットできなかったみたいね」
「A学院の男子って、ガード固いよね。ね、柿沢さん？　あなたもゲット出来なかったんでしょ？」
「案外その気にさせて、じっと奥から見つめているって感じでしたよね」
と友里菜も同調した。「でも、楽しかった～」
「ま、それならいいのよ。あたし達F女は、焦っちゃダメなのよ、分かった？」

皆は解散した。けれども友里菜は、確かに囁きを聞いたのだ。
「いつか、君と……」みたいな言い方だったが、周りがうるさ過ぎてよく聞こえなかった。それに振り返ると、寛之はなぜかふっと横を向く。その前の合コンで出会った大滝洋平とは全然タイプが違うらしい。
けれども明らかに、仲本寛之は自分に夢中だ。きっとそうなんだ！　そう友里菜は確信していた。今では友里菜は、奇妙な自信を持つようになっていた。

夢見るような涼しい瞳を持つ寛之を思い浮かべていたその時、ケータイのメール通知音が鳴った。
「誰かな？」
開けてみると、それは大滝だった。
「ああ……確か、メアド交換したっけ」
『由理奈さん　いつか会えませんか？』
「なんだよ、これ～。わたしの名前の漢字、間違ってるじゃん！」
友里菜は幾分ガッカリして、その短いメールを見つめていた。レスすべきとどうか、しばらく躊躇っていたが、やっと友里菜は返事を打った。

『私の名前は　友里菜。由理奈じゃありません。でも考えておきます。ありがとう　友里菜』

「ま、これでいいかな」

と友里菜は送信した。翌日友里菜は溜まっていた練習を狂ったようにやり出した。自分が何をしに、ここまでやって来たのかを、やっと自覚したからだ。

かくして連休は終わった。大滝からも、仲本からも、そしてなんと芳人からもメールが来なかったのだ！　友里菜は再び自信を喪失してしまう……。

12　思わせぶり

１２　思わせぶり

従姉の美里とデートらしきものをしてしまった芳人は、友里菜に対してどこか後ろめたかった。親戚だし、別にカノジョをこっそり作ったわけでもないというのに、なぜか自分が許せない。

そんな芳人を淳平は「お前～、案外純情やな」とからかっていた。

「そもそも従姉とは何にもなかったんやろ～が」

「うん、ただ食っただけ。でも何を食べたか思いだせんのや。美里ちゃん、薄物のブラウス着てて、肌にピッタリのキャミが丸見えでな」

それを聞いた淳平は、ハハハハ～と高笑い。

「お前、うろたえとるって言うたやないか。そやのに、変な事想像してるやんか。ちゃんと見るとこは見てるし」

「やっぱ、俺、男やもん」

「そやな～、しゃあないわな。年上の女子は妙に色っぽいから」

「き、禁断症状かも知れんわ。なんか友里菜に連絡し辛くて」

「友里菜ちゃんからは？」

「それがさ、あいつからも何も連絡ないんやわ」

「あ～あ、ガタイだけはいいのに、お前ほんま蚤の心臓やな。そんなに心配やったら、横浜に行けよ」

「行けっこないやんか、こんな時に」

「あ！　先生が来た～」と淳平が囁いたので、二人の会話はそれっきりになった。もやもやした思いを抱きながらも、芳人は勉強に没頭して行かざるを得ないのだ。

一方友里菜は、自分がこのクラスでは下から数えた方が早いほど

の成績なのだと気づいていた。この大学では、高校時代は全て“女王様”クラスの女子ばかりが群がっているからだ。けれども、なぜか不思議にここでは友里菜は、高校の時に感じていたような自信のなさや劣等感は感じていなかった。
同じ大学というだけで、奇妙な一体感がある。女子大だからだろうか？　それとも大学のカラーというのは、確かに存在しているらしい。
けれども、何だかんだと忙しく、友里菜はホッとする暇もなかった。7月初めには、最初の実技試験があるからだ。

その直前の六月、美術クラブは港にスケッチに行く事になった。初夏で、そろそろ汗ばむ気候だ。梅雨の合間の晴れた日だった。港に停泊している氷川丸や、その当たりから見える赤レンガ倉庫が見事だ。絶好のスケッチになる。
部員、と言っても10人以下の数人しか参加していなかったが、各自が各々場所を定めていると、
「ちょっと、ちょっと、柿沢さん」と手招く美央の姿が近寄って来た。
「あ、は～い。何か？」と友里菜は脇にスケッチブックを抱えて駆け寄った。
「この間の合コンのことだけど……」
「あら？　もう一ヶ月前ですよね」
「そんなに経つかな？」と英文学科のガリ勉の美央は首を捻ったが、すぐに本題に入った。
「ねぇ、向こうのA大の部長から連絡があったんだけど」
「へえ？　何ですか」
「あの……あなたと付き合いたいって男子が居るらしい」
「いきなりですか」
「何かメールとか来ない？」

「何にも」
「シャイなのかな、その男子」
「誰ですか？」
「例の人」
「？」
「プリンスさんよ。仲本っていう男子」
「ひぇぇぇぇ～！」
さすがに友里菜は長い吐息を付いた。

「でも……それなら、なんでわたしに直接言わないのかな」
「今時珍しく古風な男子よね～、まったく」と美央も幾らか呆れているようだ。
「それとも、奥ゆかしいって言うのかな」
「その人、直接断られるのが嫌なのかも」
「あら？　柿沢さん、お断りするんだ」
「い、いえ。そんなこと言ってませんよ～先輩っ」
と友里菜は慌てて手を振った。
あのプリンスが……そう思うと、何だか面映い気がする。そしてどこか誇らしい気もしてくる。そう言えば、芳人からはメールすらなく、少し淋しく感じていた所だった。

「じゃどう返事したらいい？」
「そーですねぇ」と友里菜は数秒だけ躊躇した。が、すぐ、
「それじゃあ、イエスって」と答える自分が居た。
「分かった」と美央はあくまでも事務的に答えた。「それじゃわたしから言っておくから。柿沢さん、本当にいいのね」
「だって、どうせ軽い気持ちなんでしょ、その男子は」
「さあ～、どっかな～～～」
意味深に言うと、美央は離れて行った。

その後、友里菜のスケッチはやたらと乱れていた。もはや景色は目に入らない。すうっーと脳裏に入り込むように、仲本寛之の顔を思い浮かべていたからだ。

13　もう一人

13　もう一人

友里菜の頭の中は、仲本寛之一色になっていたその頃、もう一人からメールが来た。

『久し振りです。メールが遅れて済みませんが、色々考えた末、僕と付き合ってくれませんか？　洋平』

「え？　うっそ～、そんな、今更……」

けれども、仲本からの返事はまだ無い時期で、友里菜は少し苛々していたのだった。仲本が自分をじらしているのでは、と疑いだしたのだ。

そんな時、大滝洋平からのメールだった。

―　遅いっちゅーのよ！　ほんま、何考えてんのやろ？　けど友里菜、このまんま放っとく？　それとも、二股掛ける？　……いや、違った。三股やぁ～。どないしょう？

自分が“悪女”だとは思わないし、オペラ『カルメン』のような尻軽女で、直ぐに乗り換えてしまう女では無いと今迄思い込んでいた。けれども、どうも違うようだ。

―　わたしも、もうカルメンを嗤えない。自分のしていることも、似たりよったりや。けど、そんなに深入りしていないのが救いかな？　元々わたしは、男子に深入りしたくないし。だって、勉強する為に大学に通っているんやし……。

大学生の目的とは何か……？　最近の友里菜はそんなことまで思案していたのだ。

「とにかく」と友里菜は自分に言い聞かせた。「別に罪悪感を持つほどのことはしてないし」

そう無理やり納得させると、メールのレスを打った。

『わたしも色々考えましたが、軽いお付き合いならいいかなと思います。大滝君はそれでいいですか？　もしもそれでいいのなら。友里菜』

ちょっと躊躇ったが、友里菜はメールを送信した。

「ああっ！　血迷ったかな～、わたし。けどこのケータイ、新しいタイプに変えようかな？　今のって、折れ曲がるタイプじゃんか。こんな古臭いの、ここの女子大で使っているのは、わたしぐらいやわ～」

友里菜は自分の泥臭いケータイを一瞥した。

「そうだ！　こんなことよりも、もう直ぐ実技試験だわ～！　ピアノと声楽の試験日、手帳に記しておかなくちゃ！　それどころやないのにぃ、わたしって何してんのかしら？」

友里菜はやっと我に返り、ケータイをベッドの上に放り投げると、自室のピアノに向かった。八畳の部屋とは言え、ベッドと歩のアップライト・ピアノを置くと、もうほとんどスペースが無いのだ。

程なくして、友里菜はピアノではモーツァルトのソナタ、そして本命の声楽試験の曲三曲を練習し始めた。窓ガラスは二重だが、けれども思い切り音をたてなければならないので、近所迷惑かも、と以前叔母の歩が夫の村越氏に囁いていたのを、友里菜は気づいていたのだが。

友里菜がベリーニの一曲を練習していると、ノックする音がした。

「は～い！」

「入っていい、友里ちゃん？」

「ええ！」

すると歩が躊躇いがちに、中に入って来た。

「何か？」

「あのさぁ」と歩は揉み手をしている。

「え？」

「今、もう九時でしょ？　実はね～、近所の人から夜は練習やめてって言われてるの。結構聞こえてんのよ、この辺」

「あ、ごめんなさい。でも今、試験前で……」

「それは分かってるの。でも……もう少し静かにできないかな～」

「静かに歌うのって……」

それは無理です、と友里菜は心の中で言ったが、「分かりました」と言ってピアノの蓋を閉じた。

「ごめんね、無理言って」

「いえ、いいんです。済みませんでした」

「それじゃ」

そう言うと、歩は階下に降りていった。

「ちぇっ」と思わず友里菜は舌打ちしてしまう。

歩が悪気ではないのは知っていたが、このままではやはり親戚の家に居候するのは無理のようだ。独立するか、それとも寮に入るしかない。どっちにしても、又お金が要る。友里菜は両親に対して気が引けたが、それでも夏休みの後にはそうしなければ、自分の学業が続かないのを、嫌と言うほど感じた。

友里菜が腐っていると、ベッドの上のケータイが鳴った。芳人からだ。

「もしもし、芳人ぉ？」

「はーい、友里菜かぁ」

と答える芳人の声は、あっけらかんな響きがする。

「お久しぶりやな～」

「一体、今まで何してたんよ？」
「塾やんか」
「じゃなくって……何でわたしに電話してくれへんのぉ？」
「友里菜からだっていいんやけどな」
「でも塾だからって」と友里菜は今までの腹立たしさを、思わず芳人にぶつけていた。

１４　やっぱり、芳人が気楽なのに・・・

１４　やっぱり、芳人が気楽なのに…

芳人はケータイの先からキンキン響いてくる、友里菜のヒステリックな声にまず驚いた。楚々とした雰囲気に似合わず、どこか繊細で荒々しく、且つ又我がままな部分を持っている友里菜だと芳人は知ってはいたが、こうまで刺々しい声音は初めてだ。

まして芳人は、今の友里菜が二股も三股も掛けて居ようとは、知るよしも無い。

「どないしたん？　なんや～、ストレス？　なんかあったん？」

「いや……そんな事無いけど……」

そう答えた友里菜は、急に目が覚めたようになって、恥ずかしく感じた。自分の持つ最も嫌らしい部分を、芳人に見せてしまったのが愚かしい。けれどもそれだけ、友里菜は芳人には正直になれるのだ。

「あ……ごめん」と友里菜は謝った。「ちょっと、あって……」

そう言われるだけで、芳人は友里菜がいじらしく感じてくるのだ。恋と言うものは、何でもすぐに忘れ去れるらしい厄介な代物かも知れない……。

「僕も悪かったよ」と芳人が言った。「忙しいとか、何とかかんとか言い訳ばかりで。今日日、ケータイとか意志を伝えるのは何でもあると言うのに、ついほったらかしてて」

「いいのよ。芳人はB型だから、そういうの苦手なのは知ってるから」

と友里菜も言い繕った。

「あのなぁ友里菜～、夏休みには大阪に戻るんやろ？」

「当たり前やん」
「何かそっちに染まってしもうて、もう帰らへんのかと心配になってな」
「あほらし。そんな事無いわよ。親だって心配してるし。それにそう簡単にこっちに染まるはずが無いやんか」
そう言いつつも、いつの間にか短期間で関東に染まりつつある自分を、ハッと顧みた友里菜だった。元々こちらは、母親の実家なのだ。純粋の関西人である芳人とは違う。

それから二人は他愛の無い会話をし続けた。とうとう最後まで、友里菜は先ほど歩から言われた言葉で傷ついたことを、切り出せなかった。
けれどもケータイを切った後、どこか心がほんわかしてくるのはやはり芳人の人柄とか、幼馴染の気安さの所以だろうか？
友里菜はドサリとベッドに仰向けに横たわり、じっと天井を見上げた。

「寮、かぁ……芳人にも相談すれば良かったかな～。そや。のりっちに相談してみよう。のりっちはずっと寮生活やし、少し不安だけど、ここは一年生の一人暮らしは禁じているし。それにのりっち、あのカレシと巧く行ってるのかなぁ～」
友里菜は、末松規子が例のK大の眼鏡男子と付き合っているのを知っていたので、ちょっと聞きたい事も多々あったのだ。
「とにかく、もう勉強する気も無くなったし、寝よかな」

パジャマに着替えながら、友里菜は芳人、大滝、仲本の三人の顔を思い浮かべていた。自分が“王女様”になったような気がする。それは高校では絶えて味わえなかった、“蜜の味”だ。
―　でもやっぱり気が置けないのは、芳人だよね～。芳人とだった

ら、お気楽なのに。
あ～あ、芳人がこっちに居たらなぁ～。てか、来年当たり、こっちの医大とか受けないんやろか？　だったら、わたしだってあちこち浮気しなくて済むのにぃ。
ごめんね、芳人。別にただのお付き合いだけやから、、、、だからいいでしょ。

友里菜は自分が、エゴの塊なのを知っていたし、自分の中に持つ“悪女”の素質にもようやく気付いていた。
それなのに、どうしてもそれを正当化してしまう自分も、確実に存在する。この矛盾は多分、誰もが持っている物なのかも知れないが。

けれども、実技試験日は段々近付き、さすがの友里菜もそれどころではなくなった。友里菜は頭を入れ替え、必死になって練習に励みだしたのだった。
けれどもその反面、母親にこう連絡する事も忘れなかった。
「ねえねえ、お母さん？　わたしさぁ～、二学期から寮に入ろうかな～と思ってんの。どうかなぁ？」
「えええ～～～～っ！？」と母はさすがに驚いていた。
「だめ？」
「何かあったの？」
「わたしさぁ、うるさいんだって！」
「えっ、歩がそう言ったの？」
「ん～、まぁね。あ、でもそれが理由じゃないのよ」と珍しく友里菜は弁解した。
「結局わたし……やっぱり窮屈で。お金かかるの知ってるけど、でもいいよね？」
母親は絶句していた。けれどもやがて、
「まあ、お父さんと相談するわ。半年で３０万はかかりそうだけど

ね」
と渋々言い出したのだった。

「ゴメンね、我がまま言って」
「教育にお金かかるんは、仕方ないかもやね。何しろ一人っ子だから、もうひとり居ると思えば何とかなるだろうし」
歯切れが悪いものの、結局友里菜は両親に自分の思い通りのことを押し付けてしまったのだった。そしてその実、寮に対して少し不安も感じていたのだ。
けれども明日から実技試験。友里菜は雑念を追い払った。

１５　初めての実技試験

１５　初めての実技試験

明日いよいよ実技試験だというので、歩はトンカツを作っていた。どこか嬉しそうなのは、姉である母親から、友里菜を二学期から寮に入れると連絡があったせいだ。子供の居ない村越家にとっては、やはり姪と言えども気苦労だったに違いない。

「さも食べて、食べて！　声を出すんだから、力付けなくちゃ」

「そうは言っても……今から緊張して、余り食欲が出てこない……」

と弱気な友里菜。

「友里ちゃんは、細いからねぇ～、ま、姉さんに似てるんだろうけど」

と歩はいそいそとしていた。

食べたくないトンカツをどうにか胃に押し込んで自室に戻ると、メールが入った。

『夏休みになったら、何か映画に行きませんか。返事がおくれてすみません』

なんと、もう半ば忘れていた仲本寛之からではないか！　それも試験日前の日に！

けれども冷静に考えると、仲本は友里菜の試験の事など知りはしないのだった。大体、夏休み前に実技試験などがあるのは、音楽学部ぐらいだろう。

「ちっ、なんだよぉ、今更～。それに今それどころじゃないんだから」

そう舌打ちしつつ、けれども友里菜は返事を打った。

『お誘いありがとう。けれども私、明日から試験なんです。それに

夏休みは、大阪に戻りますから行けるかどうか』
　ところが直後に又メールが来た。
『実はもう前売り券2枚買ったんです。ヴァージン・スーサイズって言うんですけど、興味ないですか？夏休み大阪に戻る前でいいです。日にちは柿沢さんが決めて下さい。遅くなって済みません』
「『ヴァージン・スーサイズ』？　……って、なんやろ？　ぴあに載ってるかな？　スーサイズって、ｓｕｉｃｉｄｅｓ＝自殺、のことなんかな？　処女の自殺！？　なんや、それ？」
　こんな奇妙な映画が好みとは、さすがに美術部だけある、と友里菜は妙に感心した。芳人なら、とても思いつかない映画だ。と言うより、芳人はリアリスト（＝現実主義者）なのだろう。多分……。ロマンチストに見えて、実はリアリスト、それが芳人の本質なのかも知れない。

　友里菜は思わずメールの返事を打っていた。
『大阪に帰る前ならいいかな、と思います』

　試験前に不純な事をしていたせいかどうか、夜中に腹が痛くなった。下痢だ。
「これじゃ何の為にトンカツ食べたんだか……」
と何度もトイレに行きながら、友里菜はブツブツと自分に毒づいていた。

　翌日、下痢の話をのりっちにしていると、どこから聞きつけたか横からアンナが口を差し挟んできた。
「下痢って！？」
「大きな声で言わないでよ」と友里菜は顔をしかめる。
「ハハハ、実はあたしも、した。下痢。腹を下しちゃった。緊張のせいかな～」
　如何にも都会風に洗練されたアンナが言うので、友里菜も少しお

かしくなって笑った。幾らか緊張が解けたようだ。
「試験前はね、何を食べても一緒よ」とのりっちも言う。

「ねえ、のりっち。わたしさあ、来期から寮に入ろうかな～と思っているんやけど、どうかな？」
「あれ？　友里菜、叔母さんとこじゃないの？」
「いや、ちょっとね」と友里菜はもごもご言い淀む。
「その話は又今度ね。もう直ぐ本番だから。あ～あ、段々わたしもお腹が変になってきたよぉ～」
とのりっちも情け無さそうに言う。

下痢をした、などというばっちいハナシができるのは、多分ここが女子大だからだろう。同性のお気楽さというものを、友里菜は初めて肌で感じた。ここには、ある種の“気取り”というものが無いのだ。男女共学とはそこが違うのだろう。
例えどんなお嬢様であろうと、やはり女だけというのはあっけらかんとしている。

やがてＡＢＣの順番に名前を呼ばれた生徒達は、広い講堂に入って行った。そこは音楽学部だけの講堂でチャペルではないが、やはり緊張する。
「いてててて～、あ～あ、やっぱりあかんわ」
友里菜の前は、いつも取り澄ました感じの伊藤有紀だった。有紀はツンデレだというもっぱらの噂だったが、今日の有紀はいつも違って落ち着きがなくそわそわしている。

「どしたの、柿沢さんったら？」
「お腹が痛いぃぃぃ」
「あら？　あなたでもお腹壊すの？」
「あなたでもとは何よ」

「いつも落ち着いた雰囲気だもん。でも結構面白いんだ……」
「面白くないっ。緊張してるの」
「それはわたしも一緒。だから～」
有紀が何かを言い続けようとしたとき、前の生徒が出てきて有紀が呼ばれた。

「じゃお先にぃ」
「頑張ってね」
「うん、まぁね」
有紀はニヤリと笑ってドアの陰に消えた。暫くすると、ドナウディの歌声が流れてきた。細いが綺麗で甲高いリリック・ソプラノだ。次はモーツァルトの「コシ・ファン・トゥッティ」の中のアリア。
「上手いなぁ」と思わず友里菜が呟くと、隣の生徒が耳打ちした。
「多分、この中でも一番か二番だと思うよ」
友里菜は妙に納得したのだった。有紀との長～い友情は、こういう風に始まったのだった。

16　寮へようこそ

16　寮へようこそ

実技試験が終わると、いよいよ夏休みの始まりだ。友里菜にとっては始めての大学の夏休み。本来はウキウキしていいはずだが、二学期から寮に行く為にまずはその寮の探索から始まった。

「寮には気をつけた方がいいよ」と有紀が友里菜に囁いた。

「どうして？　まっさか～、幽霊が出るとか、じゃないよね」

「いやいや、元々女の園なのに、寮はもっともっと女ばっかりだから、さっ」

「男は皆無？」

「そうよ、まるでタカラヅカか、女版ジャニーズってとこかな」

「そう言えば、キムタクってステキね」

「ぜんぜ～ん分かってないのね、柿沢さんは！」

「てか、その柿沢さんってのやめない？」

「うん、そうだね。姓で呼ぶのって、仰々しいし。わたしは、有紀だけでいいよ。だけど柿沢さんは……」

「友里菜でいいじゃん。あ、わたしあなたのこと、ゆっきと呼びたいんだけど」

「勝手にすれば？　あなた、ユリナか……う～ん、平凡！」と有紀がニタリと笑った。そういう所は、あの綺麗なコロラトゥーラ・ソプラノの主とは到底思えない、どこか悪戯っ子のような微笑だ。わざとらしいのだが、友里菜にはどこか可愛らしく感じた。友里菜にはない特徴的魅力的、そして悪魔的な笑いだ。友里菜とはタイプの違う人間なのかも知れないが、ただ一つ共通している事は、どちらも一人娘だということ、歌が専攻だということだけ。

終業の日、有紀が思わせぶりな目付きで帰った後、のりっちがや

って来て、友里菜をいよいよ寮へと案内する事になった。
F女の寮は数棟あるが、広いキャンパスの端に木々に囲まれてひっそりと建つ。のりっちはその中でも最も古そうな寮に入った。
玄関には大きな机があり、古風な電話の前には、一人の女子生徒がチョコンと座って居る。
「この方が来学期から入寮される方ですね？」
「あ、先輩っ！　そうです。大阪から来た柿沢友里菜さん」とのりっちは馬鹿丁寧に答えた。
「ここでは、先輩後輩の関係はうるさいのよ、分かった？」
と、のりっちはひそひそと友里菜に耳打ちする。「言葉遣いとか注意するのよ」
「へぇ～～～え！？」
「そんなに驚かなくていいのよ。別に意地悪とかじゃないんだから、昔からの風習らしいんだ」
「戦前のお嬢様学校の？」
「そ」とのりっちは簡単に言った。

「柿沢さんと言いましたね、ここに書いて下さい」
と先輩が紙を差し出した。
「わたし、三年の芦田美香」と彼女は言った。「わたし、北海道だからまだ居るの。多分わたしが最後まで居ると思うわ」
「ですよね、芦田先輩は当番ですからね」
「誰もやる人が居ないからやっているだけじゃない！？」
そうきつく言いながらも、美香の目は笑っていた。
「こう見えても、冷暖房完備なのよ、ここは。だって、横浜って夏は暑いんだもの。そして冬は寒い。ま、その分こっちがお金払っているんだけどさ」

友里菜が全欄書き終えると、のりっちはやっと上に上がって友里菜を案内し始めた。

寮全体がシーンとしており、冷房のせいか湿っぽい。時々、どこかから笑い声や話し声が微かにする程度だ。
「皆ね、帰り支度しているの」とのりっちが囁いた時、向こうから至極健康的な脚を出した、ショートパンツの女子生徒が走ってきた。
「よおっ！」と彼女はボーイッシュに挨拶する。「新入り？」
その髪の毛の短い、けれども可愛い顔をしたボーイッシュな女の子は立ち止まった。
「あ、はい」と友里菜は思わず頭を下げた。「来学期から……」
「そうかぁ～、寮にようこそ、新入りちゃん」
「あ、この方は四年生の良子様」
「良子……サマ！？」
「知らないの？　四年生は、サマ付けなのよ」
「サマ……付け？」と目を白黒する友里菜を見て、その“良子様”は男っぽく言った。

「なあっ、新入りに変なこと吹き込まないでよ」
「済みませ～ん」とのりっちはペコリと頭を下げる。
ハハハハハというカラカラした笑いと共に、良子様は去って行った。
「ステキな人ね……」と友里菜は良子様の背中を見つめて、うっとりと言った。
「ありゃ、そう？　ま、いいわ。あなたね、合格！　この変人ばかりの寮の住人になるのはね。あっという間に、溶け込むわよ。うふふふふふ」
のりっちは、クスクスと笑う。
「寮にようこそ、か……」
友里菜はその言葉を噛み締めていた。

17　プリンスはヘタレ

17　プリンスはヘタレ

摩訶不思議なF女の寮に出かけた友里菜は、翌日はA学院大美術部の仲本寛之と原宿で待ち合わせて、映画『バージン・スーサイド』に出かけたのだった。

映画も又理解不能なもので、出てきた二人はしばし黙り込んでいた。少々気まずい雰囲気の二人は、ぼんやりしていたせいか、誰かにドーンとぶつかってしまったのだ。

「ぼんやりしないでよ！」

そう叫んだ女の子は、顔面真っ黒に白いアイライン……俗に言う“ガングロ”の女の子である。

「あ！　す、すみません」と寛之は意外にも、怖そうに身を縮めて謝っている。ガングロの女の子は、「ちゃんと注意してよね」という表情で、寛之を睨みながら去って行った。その後姿を情け無さそうに見つめている寛之を見ていると、友里菜は何だか苛々してきた。A学院大美術部のプリンスと呼ばれているほどの美形の容姿を持ってはいる寛之だが、その心は外見ほどではないのかも知れない、と友里菜は思った。

それでも道行く女の子達が、寛之をチラチラ見ているのが、少し誇らしいような、けれども悔しいようなそんな不可思議な気分なのだ。

「あの映画、どうでした？」と寛之が渋谷方面へと歩きながら言いかけると、友里菜は「フン」という顔をしてみせた。

「さっぱり分かんなかった。何だか、次々と姉妹達が死んでいくのって……ブキミ〜〜」

「ですよね」と寛之は相槌を打った。「あんまし、面白くない映画だったのかなぁ～」
「あ……そんな事無いから……結構美的だったし」
と友里菜は寛之が可哀想になって、言い繕った。
「今度は、美術館とかがいいですよね」
―　こいつ、まだ次のデートのことなんて承諾もして無いのに……案外厚かましい奴なんやわ。
一つ分かった事は、寛之はプリンスと呼ばれている割には、純朴で素直な性格のようなのだった。人は、見かけだけで判断してはいけない。
確かに、寛之は美形だったが、なぜかそれ程心がときめかないのだ。けれども一緒に居て、不愉快な男子ではない……。むしろ得意な気がする。

「うぐっ」とまたまた寛之が呻いたので、友里菜は何事かと振り向くと、背の高い若い女が寛之をぐっと睨みつけていた。
背が高いと思ったのは、それは間違いで、実はその若い女は、下駄のようなハイヒールを穿いているのだった。どうやら寛之は、その女とぶつかりそうになって、逆にハイヒールで蹴られてしまったのらしい。

「何か文句ある？　あ～ん？」と若い女が憎たらしく言うと、
「あ、ありません」と、又しても寛之はペコペコ謝るのだ。
「悪いのは、そっちでしょ」と、堪らず今度は友里菜が、寛之の代わりに文句を言うと、
「ふん、カノジョか。冴えない女の子！」
そう言い放って、そのとんでもない高いヒールの女は去って行く。
「何も謝る事無いじゃん」と友里菜は寛之に腹が立って言った。

「けど、おっかなくて。てっとり早く、謝るのがいいと……」

―　こいつ、本当にヘタレ！　芳人なら、こんな時、憮然として謝らないと思うけどな。ま、それだけ芳人が無骨と言うことかぃな？　それとも……。

「あの」と寛之は、友里菜の妄想を打ち破った。

「どこかで、飯でも食いません？　飯！　僕、腹が減ったな～～」

―　この言い方……プリンスの言い方とちゃうやん！

「ねぇ！　仲本さんっ」

「はいぃ？」

「こういうとこ、滅多に来ないの？」

「うん、まぁ。僕は、葛飾区の方ですから」

「それって？」

「うん、下町でさ、実はね、僕はこういう所は、本当は苦手で」

―　なぁんだ！　プリンスはプリンスでも、『下町のプリンス』やったんやわ！　それに仲間からも『葛飾柴又』とか呼ばれてたし。

少しがっかりしたものの、寛之の庶民的なところに、友里菜はどこか引かれた。芳人には無い魅力があるようだ。その上、端正な横顔はズーッと見ていても全然飽きない。美術部と言うより、寛之自身が“美術的な彫像”そのものだからだ。

―　心は騒がなくても、こんな美形は滅多に居ないぞや。一緒にそぞろ歩くだけでも、いいのかも知れない……。みんなにも見せびらかしたいし。

明日は大阪に戻るというのに、友里菜の気持ちは打算的でどこか他所にあった。そして友里菜は、ついつい次のデートの約束までしてしまったのだった。少々頼りない下町の王子様だが、王子様には、確かに……違いない……。

18　オレオレ詐欺犯

18　オレオレ詐欺犯

「いよいよ、友里菜が帰って来るなぁ～」
と芳人がうきうきしながら、進学塾の帰り道、駅近辺りで淳平に耳打ちした。その顔はデレている。友里菜がヘタレのイケメンプリンスとデートしているなど、想像もしていない。
「へぇ、いつ？」
「あさって、とかやったなぁ」
「じゃあ、京都駅に迎えに行くとか？」
「まっさか！　そんなことはしぃへんからな。それにその日は、全国共通テストの日やろ？」
「そっかー」
「それにな、友里菜はそんなことを喜ばへんオンナなんやわ」
「……あああ、もう聞き飽きたわ、それ」と淳平はぶーたれた。

「で、お前ら、デキテんの？」
「その言い方、品ないなぁ」と芳人は顔をしかめたものの、直ぐに首を横に振った。
「いいや、あかんねん。ま、いいとこまでは行ったけど、友里菜ってガード堅いねん」
「そっかー」
「お前はそっかーしか言えへんのかぃ！」
　そう言うと、芳人は淳平の頭を小突いた。けれども、ふとケバい真っ赤な車に目を留めた芳人は目をパチパチしている。そり車は駅前にサーッと止まり、中から出てきた若い男が女性を車から引っ張り出していた。その女性はどこから見ても、風俗っぽく、その若い男も洒落た服を着てはいるが、どこかそぐわない。まるで服を着て

いるのではなく、“服に着られている”といった顔だ。

「あっ、あいつぅ！」
「へ？　芳人、あんなん知ってるの？」
「う、うん」と芳人は言うと、その若い男の猿顔をじっと見つめていた。
「じゃ、俺ちょっとこの辺で。駅前の本屋に寄るさかい」
「ああ、じゃあな、明日」
そう言うと、淳平は素直に離れて行く。その素直さが芳人にはありがたかった。

淳平が駅に吸い込まれると、芳人はそろそろと、女性と別れたその若い男に近寄った。
「よっ」
若い男は、不自然なほどギクリと振り向く。そしてそのちっこい目が、芳人を捕らえた。
「あ」
「樋口だろ？　久し振りやな」
「あ……ああ……芳人、かぁ」と樋口は、両手をポケットに入れると、上等な服に完全に負けた顔をしかめた。その髪すら、今では突っ立ったイケイケ髪だ。
「ああ、久し振り。なぁ樋口ぃ、随分羽振り良さそうやないか」
「まぁね」と樋口は虚勢を張ったようにつぶやいた。
「何か用か？」
「まぁ用は無いけど、昔の友達やんか、樋口」
「相変わらず、芳人は自信家やな。今何してんの？」
「受験生、つーっかな、予備校生」
「んな格好してると思った」と樋口はツンツンイケイケヘァを、手でいじった。

「あ、俺行くわ」
「その車、借りてんのか？」
「まさか！　俺のや」と樋口は怒ったように言った。「悪いんか？」
「お前、自分で稼いだん？」
「そや！　どこが悪いねん。俺一人で稼いだんやで！　オカンと二人暮らしやけどな、もう誰にも馬鹿にされへんわ！　世の中、金やな、金やわ」
昔の、苛められ泣いていた樋口とは違っていた。今はその瞳はどこか不遜で屈強で、世の中で精一杯抗っているように見える。けれども芳人は、高校中退の樋口がなぜこんなピカピカの外車に乗れるか、不可解に感じた。

―　あり得へん！　まさかな……？

「芳人、見とき！　金があったら、みんなへいこらや。以前は見向きもしなかったネェちゃんやその他の奴ら、今では俺の前でペコペコしとる」
「確かに成功するのは悪いこっちゃないけどな」
「じゃあ、俺行くわ」
そう捨て台詞を吐くと、樋口はその車に飛び乗り、振り向きもせず、あっという間に芳人の前から姿を消した。
「あいつ……変わったなぁ。そやけど、変やな。どこか変や」
芳人は小首をひねった。今の今は、受験や友里菜の事など全く脳裏からは消し飛んでいたのだ。
「ま、いいか。俺、樋口のこと、やっかんでいるんやろか！？」

樋口がオレオレ詐欺で捕まったことを知ったのは、友里菜が大阪に戻って来た次の日だった。
友里菜に連絡しようとケータイを持った時、母親が広げている新聞に目が行ったのだ。社会面だった。

「ちょ、ちょっと貸して！」
「なんや、どしたん？　せっかちやなぁ、相変わらず」と母親は小言を言ったが、芳人は構わず顔を新聞に突っ込んだ。
そこにあった記事。
『オレオレ詐欺グループ、逮捕』
主犯は他の名前だったが、その中に樋口の名前が小さく載っていた。
―　やっぱり……そうか。あいつ……犯罪者になってもうたんかぁ～。
芳人には、中学時代のまだヤンチャだったが、無垢な樋口のサル顔が、ふと浮かんだのだった。

19　せっかくの夏休みが…

19　せっかくの夏休みが…

もやもやした思いを抱きつつも、やはり芳人はれっきとした男子。片方では、友里菜に再会するのを待ち望んでいたのだった。

そして明日は、塾の合間を縫ってやっと友里菜に会えると言う日、どうしても鼻の下が長くなり、数学の“鬼の”高橋先生の言う事が耳に入らない。

「ちょ……大久保っ。鬼がお前を睨んどるでぇ」

と横の淳平が耳打ちしたが、遅かった。

「おいっ、そこの大久保！　ちっとも聞いとらへんやないかぁ！」

と案の定高橋先生のドラ声が響き、他の生徒は自分でも無いのに身を引く。芳人だけがキョトンとして、目をパチパチさせた。

「え！？　僕？　僕ですかぁ～？」

「そや。何をへらへらしとんねん！　ふん、大方可愛い子とセックスでもしている妄想してたんとちゃうかいな」

みんながクスクスと忍び笑いをしている中、芳人は真っ赤になって言い繕った。

「ま、まさか～。ちょっと別のこと考えてて」

「ま、いいさ。若い男子は当たり前やな。けどな、この代数、解いてみぃ？　解けへんかったら、居残りやでぇ」

「ええっ、そんなアホな！」

鬼の高橋は、黒板にスラスラと積分の式を書いた。

「ほら、これや。これ解けたら、勘弁してやる」

「ええ～～～っ！」

芳人は素っ頓狂な声を上げた。みんなの視線が自分に向けられて

いる。
慌てて机から飛び出したせいか、前の生徒の机の角に当たった芳人は、「いててっ」と言いつつ、前に出た。
「どや？　出来るんかぁ、その低脳頭には？」

芳人はむっとして高橋先生を睨み返す。一発触発の危機を感じたのか、クラス中が固まっていた。
けれども芳人は白いチョークを手にすると、カタカタという小気味良い音を響かせて、チョークを走らせた。
「むむっ。あいつ、出来るやんか」と淳平が思う間もなく、書き終えた芳人はチョークを置いた。
「解きました」
数秒の時が流れた。
「うん、見事やな」と言う高橋先生の声がしたと思うと、先生はパチパチと手を叩いた。
「してやったりやな、あいつ」と淳平は唸っていた。
「ようやったやん、お前」と机に戻った芳人に、淳平が感じ入ったように囁くと、芳人はニッと嗤ったのだった。
「実はな……昨日の晩、その式だけ解いてたんや、偶然」
淳平は呆れたように口を開けた……。

「……て感じやったんや、昨日」と芳人が久し振りに会った友里菜にそのことを言うと、友里菜は「あ、そう」とだけ、拍子抜けしたように答えたのだった。
友里菜は化粧していた。少し前まで、素ッピンに近い友里菜しか見ていなかった芳人は、たった数ヶ月の間に蛹から蝶に変化した友里菜の姿に、どぎまぎしていたのだ。
以前は素ッピンでも綺麗だな～とは思っていたが、ほんのりルージュを引き、細いアイラインにブルーのアイシャドウの友里菜は、もう昔の友里菜ではないみたいに感じる。

「何じろじろ見てんのよぉ、芳人は」と友里菜は、相変わらず変化無しの芳人に向って拗ねたように言った。ドキドキ感はなぜか無いが、やはり落ち着くのだ。
「いいや、別に。ほら、久し振りやから、なんや～奇妙な感じで」
「何が？」
「友里菜……オンナになったな～とか」
「何よ、その言い方！？」と友里菜は噴出しそうになった。友里菜自身は、自分の変化に気付いて居ないのだ。
「色っぽい……」
「本当？」と友里菜は上目遣いに問いかけた。その眼差しに、芳人はぐらっとくる。

「てか……映画何にする？」と梅田を歩きながら、友里菜は言った。
「『バージン・スーサイド』だったら嫌やから」
「へぇ、何で？　見たの？」
「え？　ああ、ええっと、友達と向こうで見ちゃったし……何か分かり難い映画やったし」
友里菜の脳裏に、チラッと寛之の顔が浮かんだ。正反対の外見だ。
「友達、出来たんか？」
「うん、出来たよ、沢山」
「そんな感じやなぁ～。青春してるって感じが漂って……いいよな、友里菜は」
「来年になったら、芳人も大学生になるんやし、それでいいじゃん」
“いいじゃん”か。もう関東弁になったんかぁ」
「映画じゃなく、どこかに行こうよ、芳人。プールとか、山とか」
「思いっきりそうしたいけどなぁ～無理やわ。今日も早く帰らんと」
「夕方は塾？」
「うん」
「そっかー」と友里菜は不貞腐れて言う。芳人がまだ予備校生なの

は分かっては居るつもりだったが、けれども実際の所、どこか壁が二人の間に存在している……そんな気がしてきたのだった。

「ごめんな、友里菜。本当は……もっと友里菜と一緒に居たいんやけど」

「いいよ、仕方ないもん」

芳人はふと、友里菜が誰かと付き合っているのではないかと邪推し始めた。それが妄想のように膨らんで、一緒に居てもどこか不安で楽しめない。

―　せっかくの夏休みなのにな……。やっぱり俺……宙ぶらりんやな。

塾に行く電車の中で、芳人は沈んでいた。

20　美しい人

20　美しい人

芳人は凹んでいた。友里菜と別れた後、余りの友里菜の素っ気無さについつい次のデートの約束を言いそびれてしまい、なぜか自信をなくして家路についたのだった。

自室に戻ると、電気も点けずにベッドにゴロリと横になり、侘しい自分の身を嘆いていた。どこがどうというわけではない……。友里菜に愛想をつかわしたのでもない。相変わらず、友里菜のことが好きだ。抱きつきたいほど、好きだ……。

だのに、二人の間に横たわる、厳然とした立場の違いが恨めしい。

向こうは、青春真っ盛りの“女子大生”！　そしてこっちは、医者志望と言えばかっこいいが、所詮浪人の落ちこぼれだ。来春、医学部に通るかどうかも分からない。

―　いかん、いかん。なんでこんなに弱気になんねん。ただ久しぶりに会った友里菜が、以前と違ってたからって。オンナが変わる、と思ったんは当たり前やんか。むしろ、洗練してきたし、いい意味で大人になってもうたやん……。それに俺を待ってくれてるやん……多分。

夕食は帰りに笑笑で食べたし、なんか暑いからクーラーでも付け、気を取り直して勉強しようと思った時に、ケータイが鳴った。

「もしや！　友里菜！？」

けれどもそれは、従姉の美里だった。

「もしもし、あっ、美里ちゃん？」

「そや。だれだと思ったん？」

「いいや、別にぃ」

「へえ、今日の芳ちゃん、妙に神妙やなぁ。なんかあったんか？」
「別に何にもないよ」と芳人は強がった。
「ならええけどな～。あのなぁ、ちょっとどっか行かへん？　芳ちゃんが空いてる日でいいねんけどさぁ」
その誘い声の艶っぽさに、芳人はしばし今のガックリ状態を忘れた。
「ううん……そやなぁ……」
「ま、浪人生では無理か」
「いや！　ちょっと待って」
言いつつ、芳人は手帳をめくっていた。
「そや！　明日の午後は空いてるんやった。夕方遅くから、塾やけど。それでもいい？」
「いいよ、分かった。わたしなぁ、なんか暇やねん。それにここに居辛くてさ」
「親の家やろ？」
「うん、けどさぁ……失業中やし、なんか居辛いねん。ちょっと出かけたかったし。そや！　ええイタリアンの店知ってるから、そこ行こか。その前に、買い物に付いて来て」
「うん、ええよ」
それから二人は、時間を指定してケータイを切った。
切ったものの、芳人は不思議な感覚に陥っていた。いくら従姉と言っても、そんなにしげく会っていいのだろうか、という奇妙な思い……。
「ま、ええやん。俺もちょっと腐ってたしな。それに美里ちゃん……綺麗やからなぁ」
少しだけ鼻の下が長くなるのは仕方ない。やはり美里は大人の女子だからだ。
翌日の昼頃、芳人と美里は梅田で待ち合わせると、午後遅い昼食

に美里に導かれるままに、小洒落たイタリア料理店に入った。
「最近は、梅田も変わったもんなぁ～」と美里は、梅田近くの高層ビル群の一角にあるレストランの机に、物憂げに肘を付きながらつぶやいた。横顔に少し疲れたような、気だるげな憂いが漂い、美しい。芳人は思わずうっとりと見とれていた。
けれどもその腕は、真夏だというのに白くて細い。そしてその手首にはジャラジャラした不釣合いな腕輪が幾重にも巻いてあるのだ。それは、美里には相応しくなかった。美しい横顔に反比例して、どこかしら下卑た気がした。

「何見てんねん？」とメニューを見つめながら、美里は芳人に詰問した。
「あ」と芳人は我に返る。「俺もメニュー見んとな。けどな、美里ちゃん」
「なんやの？」
「その腕輪、変やわ。美里ちゃんには合ってへんなぁ」
「なにぃ！？」
美里の顔が変わった。綺麗な分、怒ると夜叉のようになるのだ。
「あ、ごめん。せっかくご馳走になるって言うのに。ごめん、ほんま、ごめん」
ふふんと美里は鼻で嗤った。
「芳ちゃんって、ほんま素直やな～。そんなとこが可愛いわ」
そう言うと、美里はさっとその腕輪を取り払った。

「見てみ？」と腕を突き出す。「見たらええねん」
「へ？」と芳人は、美里の豹変ぶりに怖気づきつつ、恐る恐るその細い手首を見た。その手首には、明らかに傷跡が……。
「これって！」
「そや。リストカット」と美里は素っ気無く言う。「分かった？芳ちゃん」

「う、うん」としか芳人は言えない。美里の秘密の一端を知った気後れで、言葉が出ない。
「そんなに驚かんでも、、、、ええやん」
「でも、美里ちゃん。何で？」
「色々あったんやわ……」と美里は、窓ガラスの向こうの通りを見ながら小声で言った。
「色々、か」
「そう。現実は厳しいんやで、芳ちゃんってば」
美里は再び振り向くと、ニッと妖しく微笑んだ。
「さ、何食べるか選ぼうかぁ」

21　誘われたものの

21　誘われたものの

ランチをたらふく食べた後のこと、二人は外に出た。少なくとも芳人はたらふく食ったが、けれども美里は余り手をつけていない様だったが、芳人はさほど考えずに居た。多分美里はダイエットしているはずだと、勝手に思っていたからだ。

「美味しかったで～」と芳人は本気でそう言ったが、美里はフンと鼻を鳴らしただけだ。

「ほんまぁ？　嘘でも嬉しいわ。……ところで芳ちゃん、カノジョとはまだぁ？」

「何がまだだよぉ？」

「決まってるじゃん」と美里はその細い肘で突く。「セックス」

「ぎょ」と芳人は思わず立ち止まった。「そ、そんなにあからさまに言わんでもいいやんか」

「こんなことは、思わせぶりの方が、なんやエロいやん。だからあっさり聞いたの。まだかって。そやなぁ～、芳ちゃんのその態度見てたら、まだまだって感じがしたわ。違う？」

図星なので芳人は返ってうろたえる。

「ま、まぁな……そんな感じかな。ま、いいとこまでいったんやけど」

「ふん、あんたみたいなおぼこいのは、無理かもなぁ。図体だけはでかいのに、肝っ玉はまるで蚊や。蚊ぁみたいやから」

その笑いには、嘲笑があるようで毒々しく響き、芳人は自分の従姉ながら少し憎らしくなった。

「そやけど、友里菜は、、、ああ、あのカノジョの名は友里菜っていうんやけど、友里菜はまだその気が無いらしくてな～、そんな無

理強いなんて、僕には出来へんわ」
「関東の女子大に行ったお嬢様やさかい？」
「お嬢様って家柄じゃないけどな。ま、清楚って感じはするわな」
「芳ちゃんって、そういうのに萌えるんだ～～！」と美里は面白そうにはやし立てた。
「じゃあ、芳ちゃん……まだ童貞？」
そう言いながら、美里はそっと自分の腕を芳人の腕に絡ませた。
「ど・う・て・い」と芳人は目をパチクリんとしている。
「そっかー、その調子じゃあ、やっぱ童貞やったんやわぁ」
美里はそう言いつつ、益々その体を押し付けてくる。

「あ、あの……美里ちゃん？　……ちょっとぉ……っつーかな……」と芳人はしどろもどろだ。
そして気付いたのだった。ここは梅田の裏手。ホテルの看板が目立つ場所だと言う事を。
「なぁ……わたし、教えてあげてもいいのんよ」
「はぁ！？」
「だから……セックス！」
「んがぁ～～～」と芳人は絶句した。
「けど……僕達、従姉弟同士やねんで！」
「従姉弟やなかったらいいって言うの？」
「いや、そやないけど、、、でもぉ」
「見てみ。この通りの人達って、わたし達のこと恋人同士にしか見てへんって！」
芳人の頭にカッと血が上った。けれども、芳人は激情に身を任せるほど、美里に対しての恋情がないのを知っていた。

芳人はそっと腕を解く。
「なぁ美里ちゃん。こんなこと、あかんわ」
美里は意外そうな表情で、頭一つ大きい芳人の顔を見上げた。そ

の唇は微かに震えている。
「なんで」と美里は小声で言った。「なんでやのん？　なんであかんの？」
芳人は俯き、しばらく言葉を失っていたが、ややあってやっと答えた。
「僕達……別に恋人じゃないし」
「怖いんやね」
「違うよ」
「芳ちゃっんて、妙に辛気臭いとこあるし、そんな堅苦しいから女の子に相手にされへんのや！　今時セックスして何が悪いのよ！　愛情がなくったって、やってる人は仰山おるやんか！」
美里の言葉一つ一つが毒を含んで、芳人を打ちのめした。

「美里ちゃん……今日の美里ちゃん、おかしいよ……以前の美里ちゃんやないやん」
こう芳人が呟くと、美里の顔がみるみる内に歪み、そして道路の真ん中で突然片手を顔を覆って嗚咽し始めた。芳人は狼狽し、どうしていいか分からぬまま突っ立っている。道行く人々が、興味津々にジロジロと二人を見ていたが、やおら一人のオバチャンがつかつと芳人に近寄ってがなりたてた。
「あんたなぁ！　好きな人を泣かしてはあかんやん！　ええ色男が何してんねん！！」
「この人、僕の従姉、なん、っす、けど」と芳人。
「なんでもええけどな～、別嬪さんを泣かすは、ろくなことないでぇ」
要らないお世話だと芳人はイラついた。けれども、傍から見ればそう見えてもしょうがない。そうでなくとも、他人にお節介をやく土地柄だ。
「なあ、美里ちゃん。みんな見てるさかい、どっかサテンにでも寄

ろか」
と慌てて芳人は美里の手を引っ張ると、キョロキョロ辺りを見回した。少し離れた路地に小さなＵＣＣ（＊上島珈琲株式会社）の看板を見つけると、中に入った。そして一番奥のテーブルに座ったが、美里はまだ下を向いたままで時々すすり上げている。
「美里ちゃん……なんかあったんちゃう？　東京で？」
「東京ちゃう！　川崎や！」
「ま、似たようなもんや」
「似てへん！」
そう叫ぶと、美里はやっと顔を上げた。
「失恋？」
暫くの無言のあと、美里は聞こえるか聞こえないかの小声で答えたのだった。
「捨てられたんや……」
芳人は目をパチパチさせながら、成熟した美里の奥を覗くようにじっと対峙していた。

22　やって来た下町のプリンスに大慌て

22　やって来た下町のプリンスに大慌て

芳人との短いデートのあと、友里菜はどこか釈然としなかった。以前はあんなに会いたいと思っていたのに、いざ会ってみると「これでいいのん？」と思ってしまう自分が居る。相変わらず芳人は逞しく、又オーラがあるのに気持ちが離れたわけではないのに……なぜこんな空しい気持ちに陥るのだろう？

「ま、いいか。どっちも別に誰か他の人と浮気しているわけじゃなし……ただわたし達って案外幼いってことやんか。それに、ここに居るのもそんなに長くないし、何だか家に帰っても退屈するばかりだなぁ」

そんな頃、心の隙間を埋めるかのような、とんでも出来事が起こった。

朝だというのに突如ケータイが鳴り出し、友里菜は寝ぼけ眼でケータイを開けた。もちろん、誰から来たってことも確かめずに。

「ふぁい～、もしもぉしっ」と気の無い生返事をしていると、

「もしもしっっ、柿沢さんっ？」と若い男の声がする。それは芳人ではなく……どこかで聞いた声。

「あれっ、もしかして仲本君？」

「え……あ、そうっす」

友里菜はガバッと飛び起きた。

「どしたの？」

「いやぁ～～～」

「はっきり言ってよ」

「つまりぃ……今、僕京都に居てて」

「キョウト！？　ってことは」

「そう。こっちに来てるんです」
「はぁ～」と友里菜は溜息をつく。「で？」
「実は」と仲本はなおも躊躇いがちに言い続け、友里菜は苛々してきた。
「何よ？」
「会えないかな～と思って。せっかくここまで来たんだし。あ、来たのは僕一人じゃなく、実はグループで来たんですけどぉ～あとの二人、これから鞍馬に行くとかって。でも僕はさぁ～、暑いの苦手だし。
あの……ダメですか……？」

相変わらずヘタレだ、と友里菜は思った。けれども、どうにも憎めないヘタレ振りなのだ。きりっとした整った顔とは不釣合いなほどの、ヘタレプリンス……。
「そうかぁ、どうしようかなぁ。わたし、今起きたとこだから」
「僕、待ちます！」と仲本は間髪入れずに答えた。「何時間でも！今ね、京都のホテルに居るんです。ロビーで待ってますから……外は猛暑だからなぁ～」
「じゃあ」
友里菜は京都のホテルの名前を聞きだすと、ケータイを閉じ、大あくびをした。
「んじゃ、暇だから行くかな～」

友里菜が朝御飯もそこそこに出かける支度をしていると、母親が怪訝な顔でジロリと友里菜を見つめながら聞いてきた。
「友里ちゃん、どっか行くの？」
「うん。東京から来た友達が、京都に居るんだって。なんか、案内して欲しいみたい」
「大学の？」
「他大学だけど」

「それって……男の子？」
「別にどっちでもいいやん」
「変な人じゃないのね！？」
「やだぁ、わたしもう大学生だよ。余計な心配しないでよ」
言いつつ、友里菜は念入りに化粧を施し、口紅を丁寧に塗った。
塗りつつ、友里菜はこんなことしていいのかな、とチラッと思った。
けれども、仲本とは映画に行っただけで、特別なことはしていないし、好ましいとは思ったものの愛しているといった生々しい感情は無いのだ。

―　ただ、退屈しのぎなだけ。だからいいよね。芳人は今はただ勉強勉強なんだし……きっと塾に缶詰なんだから。

友里菜は急いで着替えると、「じゃあ行ってくる～！」と一声かけて、出かけて行った。

23　従姉のコイバナ

23　従姉のコイバナ

ＵＣＣの看板のある何の変哲も無い喫茶店で、芳人と美里は黙りこくったまま座り込んでいた。

けれども、先に口を出したのは腕を組んで窓から外を見ていた芳人だった。

「けど美里ちゃん……なんでやねん？　そこまで思いつめるって」

「相手にな……妻子が居てん」とやっとの思いで美里は口を開く。

「それって！　不倫かぁ」

「でっかい声出さんといてよっ！」と美里はふくれっ面で遮った。

「ああ……ごめん。けど、不倫には違いないやろ」

と芳人は身体を美里に寄せながら囁いた。

「ん、まあ、不倫と言えば不倫やけど。でもわたしは本気やってんから」

「相手は、パイロットとか」と芳人は面白半分に言った。けれども美里はその大きな瞳をパチパチさせると、「そうや」と答えた。

「へ！？　ほんまのパイロット？」

「嘘のパイロットなんか居てへんやんか。ま、でもな副操縦士やったけど」

「ふぅん、ようやるなぁ、美里ちゃんって」

芳人はまじまじと従姉を見つめた。そう言えば、美里は友里菜と違って、既に熟れたオンナの匂いがする。

「続いてたのは2年ほど。でも奥さんにバレた。それからは修羅場やったわ～。ちょうど会社も傾いてきたし、彼は自分から別の航空会社に行ってもうた。黙ってやで！　けどわたし突き止めて、会社の前で待ってた。航空会社って、それ外国の会社やったけど。

玄関でもめて、騒ぎになってしまって……彼、わたしのこと、罵倒したんやわ。雌豚って！」
「メスブタ！？」
「わたし、なんかむしゃくしゃして食べまくってたの。過食症いうんかな……確かに１０キロちかく太っていたけど」
「でも、今の美里ちゃん、スマートやで」
「今はな、拒食症や」
「なんや忙しいな。交互に拒食やとか過食やとか……」
「それが病気やもん。しゃあないやん」
美里は又黙り込んだ。芳人は美里が話し出すまで、じっと待っていた。

「愛するってのは、しんどいこっちゃわ。その内にな、わたしなんか仕事中に失敗が多くなって、そして太ったって言われて……クビになっちゃった！　まあ会社の業績、悪くなってたしな。
でもな、わたしフライトアテンダントの仕事、好きやってん。ほんまに好きやった。夢やったんやから。だから、頭が真っ白になってしもうて……暫くはマンションに閉じ籠って、リスカやってた。このまんま死のうかなと思ったこともあるんや。けど心配して来てくれた母に見つかって、無理やり連れ戻されちゃったぁ～」
美里はふいに笑い出した。
「な！　わたしってアホやろ？　底なしの馬鹿やろ？　へぼい恋愛小説のへぼいヒロインみたいやろ！　そやろ？　そうって言ってよ！　ねぇ芳ちゃんってばぁ、そうだって言ってよぉ！」
その笑い声がいつの間にか、歪んでいた。泣き笑いのような頬を、涙が伝い落ちている。芳人は痛ましいと思った。それだけしか思い至らない。恋愛の経験と言っても、まだまだ初心な芳人にはその言葉しか思い浮かべないのだ。
ウェートレスが奇妙な目付きで、こっちをジロジロ見ていた。

「な、美里ちゃん。みんなこっち見てるよ」
「見ててもいいやん！」と美里は叫んだ。「そんなことどうでもええ」
「美里ちゃん……まだ若いんやし、先があるやんか。そんなカスみたいな男と別れて、僕は正解やったと思うけどな」
　美里はアイスコーヒーのコップのストローを意味もなくかき混ぜながら、上目遣いに芳人を見上げた。
「芳ちゃんも随分大人になったな～。そりゃそうやわな。わたしな、何か芳ちゃんに聞いてもらってスーッとしたわ」
「ちょっとはマシ？」
「うん、ちょっとはね」と美里は悪戯っぽく笑うと、ハンカチで涙を拭いた。
「あほな従姉でごめん。芳ちゃんもな、今の彼女を裏切ったらあかんよ、絶対に」
　芳人は言葉もなく頷いたが、どこか心が落ち着かない気分だった。

「オンナとオトコって厄介やな～。僕達は遠距離やから……なんか不安があるんや、実はやけど」
「何が不安？」
「友里菜が……他の男子といちゃついてるんとちゃうかな～とかさ」
　それを聞いた美里はプッと噴出した。
「そっかー。芳ちゃんもただの人間やな、煩悩の多い男子に過ぎないんで、わたしちょっと安心した」
「変な誉め方やんか！？」
「ごめんな、こんな話してしもうて。けどほんまに恩に着るから」
「これからどうすんの？」
「そうやなぁ～。スッチーはもう懲りたから……今職探ししているとこ」
「今度は良い男とらぶらぶしなよ」
「は～い、分かりました」

と美里は、幾分晴れ晴れとしてそう言ったのだった。

２４　灼熱の京都巡り

２４　灼熱の京都巡り

仲本寛之に言われた京都のホテルのロビーに辿り着いた友里菜は、寛之をすぐに発見した。寛之は、所在無げにロビー奥の白いソファに座っていたのだが、その横顔はやはりどう見てもイケメンそのもの。

時折、ロビーをそぞろ歩く客の何人か（それはもちろん女性だが）は視線をちらちらと注いでいるというのに、寛之自身は全く気付いていないようだ。両手を合わせたり開いたりと落ち着かない様子で、ただ一人座っていた。その空間だけ、なぜか涼しく感じてしまい、思わず友里菜はニタリとしてしまう。

「仲本君っ！」

呼びかけられて、寛之はハッとして顔をあげ、それからホッとした表情を見せて立ち上がった。

「あ、あ、どうもどうも」

「急いで立ち上がらなくていいのよ。わたしだって暑いんだもん。何か飲みたいし」

近寄っていくと、寛之は益々混乱した素振りになった。

「ごめんごめん、本当にごめん。急に電話して急に呼び出して、柿沢さんには本当に悪いことしてしまったよね」

「いいのよ、どうせヒマだったし。あ、それに次のデートの約束もしてたでしょう？　でもそれって、後期に入ってからじゃなかった？」

「あ、どうも……てか、ここの飲み物高く無いですか？　ジュースに８００円だなんて……僕んちでは考えられない高値だなぁ～」

「あら？　でも、こんな高級ホテルじゃそれぐらい当たり前よ。分

かってないの？」
「あ、はい、済みません。なにせ、京都は修学旅行以来で」
「A学院生なのに、京都もちゃんとは知らないの？」
「はい、なにしろA学院に行くまで、原宿や青山通りも歩いたことなかったし……というか、一年二年は、キャンパスは元々東京じゃないし」
「あ……そうなんだ」

友里菜は、A学院生は全て金持ちばかりだと思いこんでいたのだが、当てが外れたようだ。むしろ、芳人の家の方がずっと金がある気がする。
けれども、友里菜はその８００円のジュースを飲みながら、自分が卑しくなったような気がした。昔は、相手が貧しかろうと金持ちだろうとどうでも良かったというのに、今の女子大に入学してから、なぜか気持ちがスノッブになってきている気がする。別に、女子大で出会ったクラスメート達が皆金持ちと言うわけでは無いのに、それはなぜだろうか？
友里菜は少し自己嫌悪に陥った。

「どしたんですか？　なんか、黙って。ああ、そうか！　僕の厚かましさにちょっと呆れてるんですね～分かる分かる」
―　全然分かって無いのに！　けど、ほんと、憎めない人！
「さぁてっと、それじゃどっかに行く？　東山の方から清水寺？　それとも哲学の道？」
「ええっ！？　この糞暑いのに、京都を散策するんですかぁ」
と寛之は情けない声を上げた。
「ばてちゃいますよ」
「てか、あなたね、まだ若いんでしょ。せっかく来たのに、京都の

蒸し暑さを知らずに帰るなんて、許さない！」
「ううん、困ったなぁ」と寛之は真から困っているようだ。けれども、やっと決心したのか、寛之はおもむろに立ち上がった。
そしてさっとそのレシートを取り上げて言った。
「これは僕に払わさせて下さい」
「あれ？」
友里菜は思わぬところで、寛之の洗練されたところを発見。これが芳人なら、「な、友里菜、割り勘やで」と言うところだろうか？

「でもさ」
「いいえ、僕が無理やり呼んだんですから」
「無理やりじゃないんだけど」

―　だけど、東男（あずまおとこ）のメンツはたてなくちゃーね。

けれども二人がホテルの巨大なガラス扉を開けると、そこは灼熱の古都だった。
「うへ～～」と初っ端から寛之は後悔したようだ。けれども、言った以上寛之は作り笑いをしながら、「じゃ行きますかね」と雄々しく友里菜に告げた。
暑さに強い友里菜は、あちこち寛之を連れまわす。最初の頃、寛之は我慢して付いて来たものの、ほどなくして一時間もしない内にへろへろになって、近くのお寺のベンチにへたり込んだ。

「ここで一休みしましょうよ」
「いいわよ」と友里菜はニンマリすると、その横に座った。寛之はハンカチで額の汗を拭いている。その何気ない、へたれた仕草だが、けれどもどこか色っぽい。何をしても、何もできなくても、プリンスはプリンス。絵になるのだ。
「一度、仲本君を描きたいな～」

「ええっ、まじっすか？」
「そうよ、まじで」
「この灼熱地獄を味わった甲斐があったよな～」とプリンスは本音を告げたのだった。

25　夏休みの終わり

25　夏休みの終わり

寛之が関東に戻って行ったあと、友里菜は一時的に虚脱状態になった。

大阪での友人と会ったり映画に行ったりだべったりしたものの、一向に気が晴れない。心は早や横浜にある自分に、我ながらびっくりしていた。もともと母親の故郷で在るとは言え、今まで自分の居るべき場所は関西だと信じて疑わなかったのに、今では自分のアイデンティティーは、半ば関西、半ば関東となっている。

友里菜は暇な時間は、本庄アンナや、博多に戻ったのりっちと、延々と長電話していた。のりっちも、それから会津出身の長淵響子も、みんな大学に戻りたいらしいのかおかしかった。

のりっちはだべる。

「あたしさ、博多って九州一の都会だから、大都会に住んでるとか思ってたの。それがさぁ、帰ってみたら何だかちっぽけに見えるんだわ。不思議だね～、ここに居る時は博多弁なのに、あっちでは標準語やし。そうやって、土地土地で変わっていくんやね、言葉って。

ここでは、天神ってファッションのメッカなのにぃ、何だかそんなに感じない。視野が広まったというか、それとも擦れてきちゃったのかな？」

「わたしは、のりっちのように大阪が田舎だとは思わないよ。だって、京都ってやっぱりあっちには無いじゃん。鎌倉鎌倉ったって、京都に比べればどうってことない狭い場所だしさ。

だけどわたしも、何だかあっちへ早く戻りたいって気はあるの。もともと、母があっち出身だからさ、だからかな……」と友里菜も続けた。

「わたしは、会津が今でも好きだし、東京が全てとは思わんよ。だけど、やっぱ会津って田舎だな～と思った。今度戻ったら、１０９で服を買い捲るわ」と響子まで言うのだ。

そうこうしている内にお盆も過ぎ、友里菜はいよいよ横浜に戻る時期が近付き、ウキウキしていた。大学は、お盆の間には寮すら開いていないのだが、寮が開きだすお盆過ぎになると、ぼちぼち学生がキャンパスに戻って来るのだ。

「わたしさぁ、８月末にはあっちに戻るわ」

と友里菜は、あれこれ箱詰めしながら母親に言うと、母親はなんとなく気だるく答える。

「あ、そう。よっぽど、あっちが気に入ったのね。昔は、国鉄、いやＪＲで箱をウンウン言いながら運んだものだけど、今は宅配とかあって便利よね～」

「はー、大昔のこと言わないでよ」

「昔は、パソコンもケータイも無かったし。第一、教授がパソコンで欠席とかを連絡するって、そんなこと考えも出来なかった」

「もぅお、お母さんって、懐古趣味過ぎだよ。時代に付いて行けないんじゃない？　もう老けないでよっ、早すぎるわ」

「そうね」

そう答える母親は、心なし淋しげでそして、確かに老けていた。

友里菜は戻る直前に、芳人に合った。その日は、ほぼ朝から一日中芳人と過ごした。そんな日はここ最近は珍しいのだが。

二人は、やっぱり京都に出かけた。相変わらず、残暑厳しい灼熱の京都だ。けれども、暑さは関東も変わらない。最近、日本全国どこへ行っても夏は酷暑だと思う。

下賀茂は京都の北だ。暑いし観光客もさほど居ない。友里菜は芳人の手を握ったり、そして暑いにもかかわらず、芳人と腕組みしたりした。芳人の手は暖かく、そしてどこか素朴でやはり正直な自分

を表す安心感がある。少し前に一緒に出かけた、寛之とはやっぱり違う。このゆったりした、まったりした感覚は何なのだろう？

「友里菜ぁ、どうしたん？　なんや、今日は静かやなぁ、おとなし過ぎて気味悪いやん」

「あれ、そぅお？」

友里菜は芳人の腕にぶら下がったように歩きながら、そう言った。

「わたしは、以前と同じよ」

「違うな」と芳人は断定した。オンナの変化を感じ取るほど、芳人も又大人になっていたからだ。

「昔と違って、綺麗になったし」

「あら？　じゃあ、以前は綺麗じゃなかったって？」

「違うよ、まぁ昔から可愛かったけどな」

と芳人は大慌てで反論する。「けどな……なんちゅうかいな……その……色気っちゅーもんがもっと出て来たと言うのかな。そして僕は、やっぱ見る目があるな～と確信したわ」

「一年は長いわぁ」と友里菜がポツンと言った。「もう待ちくたびれてる」

「なんや！　まだまだ先があるのに」

ふとそう言った芳人は、友里菜が急に遠い所に行ってしまう様な気がした。

「友里菜」

「なに？」

「僕、絶対に医大に受かるからな！　待っててや。浮気したらあかんで」

芳人はそう言うなり、友里菜をぎゅっと抱き締めた。向こうから違うカップルがやって来ていたが、幸いなことにそのカップルは友里菜達のことなど一切目が入らないように、自分達だけの世界に入り浸っていた。

「浮気なんて、してへん」
そう言った友里菜の胸は、ちくりと痛む。
「信じなきゃ、芳人ってば」
「けどなぁ、やっぱりどこか弱気になるんやわ」
と芳人は友里菜を離しながら、そう呟いた。けれどもその言葉とは裏腹に、友里菜のふっくらした唇を激しく奪う。友里菜も黙ったまま、そうしていた。暑さなど、もう何も感じない。胸に秘めた情熱ほどの熱さは、今はこの世に存在しないのだった。
「芳人」と友里菜はあえぐ。「好きよ、芳人。待ってるから」
その時の友里菜は本気だった。少なくとも、その一瞬だけは。
向こうの方にホテルが見える。けれども、芳人はあえて誘わなかった。
「じゃな、身体に気ぃつけて」
駅での別れ際、芳人はそう言うとニッコリ微笑み、電車に乗った友里菜をいつまでも見送っていた。
夏の終わりは、青春の終わりに似て、どこか虚しい。

26　再会したクラスメート達

26　再会したクラスメート達

9月、あちこちに散っていたクラスメート達が、F女子大のキャンパスに戻って来た。

友里菜は久し振りに、F女のど真ん中にあるチャペルを見ると、なぜか胸が高鳴った。そこから離れて、今度入部する寮が木立の中に少し見える。

「こんなんだったけ。なんだか、こんなに綺麗だとは思わなかったのに……今改めてみると、綺麗やな～」

友里菜が9月最初の日に、音楽館の前で一瞬立ち止まって感慨にふけっていると、

「柿沢さ～ん！」と呼びかける声がした。それは夏休み中に長電話していたのりっちや響子とは違った声で……。

「え？」

「おはよ！　久し振りだね」と、ハキハキした声の持ち主、少し鼻持ちなら無いって感じの伊藤有紀だった。

「あら……伊藤さん」

「又わたし達、隣同士だよね～、IとKだもん。二学期からの合唱でも、わたし達って同じソプラノだしさ」

これは宿命かも、と友里菜は思った。けれども、そんなに嬉しくない。

それでも二人は、一緒に中に入った。

「夏休み、どうだった？」と有紀が聞くので、友里菜は「まあまあ」と答える。

「伊藤さんは？」

「わたしも、まあまあ」

そう答えると、有紀はニッと笑った。
「ちょっと変わったね、柿沢さんって」
「そぅお？　伊藤さんも、少し変貌したよ」
「どんな感じに？」
「う～ん」と友里菜は腕組みして、有紀を見つめた。ここに入学して初めて、有紀をじっと見つめたような気がする。自分より少し背が低く、やや猪首だがバストが大きく瞳も口もでかい。そして、毛細血管が見えるかのような淡い肌色で、天然パーマなのかくるりとした茶色の髪の毛。そう言えば、瞳の虹彩も薄茶色。俗に言う“お茶目”な女子というのだろうか？

「可愛くなった……って思う」
「へへへへ」と有紀は笑った。「あなたもよ、柿沢さん」
生意気そうな顔が、笑うとクシャクシャになるのだ。自分にはない魅力、自分には無いチャームポイントを備えているのだ……伊藤有紀は。
「柿沢さんって、スタイルいい。男子にもそう言われるでしょ」と言う言い方も、もう嫌味には聞こえない。
「ああ、男子、ね。うん、そうかな」
「わたし、一人っ子なの。実はさ、兄が二人居たんだけど、わたしが小さい頃に亡くなっちゃって」
「え！？　ほんと？」と、始めての話に、友里菜は驚いて身を乗り出した。
「わたしは、正真正銘の一人っ子だけど」
「残ったのは、わたしだけだって、親は言うけど……仕方ないじゃんねぇ」
この話は、聞きようによっては悲劇なのだが、なぜか有紀が喋るとサラリとして嫌味が無いのはなぜだろう。
「あ～ら、お二人さんっ」と言いかけたのは、本庄アンナだ。背が

高く、都会的でいつも洗練されているお嬢様が、手にフルートの入った箱を提げていた。
「やっと、始まったか。わたし、夏中退屈してたよ。ヨーロッパ巡りしてたんだけどさ」
の言葉に、友里菜と有紀は互いに顔を見合わせた。
「わたしの両親は、ただのサラリーマンだから。それは無理だけど」と友里菜が言うと、
「わたしのところもそう」と有紀が続けた。「アンナちゃんはいいよね～、親が社長さんだもん」
「そういう言い方は、このF女では無しよ」とアンナは笑いながらスルリとかわした。

「三人揃って何言ってんのぉ」と言う甲高い声は、末松規子こと“のりっち”だ。のりっちは、綺麗な女子なのだが、少し騒々しい所がありそれが益々つのってきていた。ガーリーな衣装が、更に磨きがかかったガーリーさだ。
「さ、行こ行こ」とのりっちが促した。「なんだか、ドキドキするね。変なの！？」
「のりっちって、ここに帰ってきたのが余程嬉しいみたいだよね～」と友里菜が茶化すと、「あったり前よ！」とのりっちは元気よく答えた。
四人はガヤガヤ言いながら、自分達の溜り場の教室に入った。既に半数の先輩達やクラスメート達が集まっている。皆、始業式のチャペルでの礼拝を待っているのだ。

「わたし、この冬洗礼するの」と、隣に座った有紀が友里菜にそっと囁いた。
「え！？　洗礼……って？」
「驚かないでよ。だってここ、ミッションじゃないの。柿沢さんは、そういうのに興味ないの？」

意外だった。全然そういう風に見えない有紀が、実は信仰を持っていたとは。そして、兄達を失っていたとは……。人は見かけに寄らない、といういい例だ。

「わたしは」と言いかけて、友里菜はふと口をつぐんだ。今まで考えたことすらなかった。教会なんて……信仰とか、洗礼とかも。確かにここはミッション系女子大だというのに。ただ、彼氏と遊んで、楽しく勉強して、良い音楽家になることしか。せいぜい、ステキな映画を見て、スタイル良くなりたいとか……。

なぜか、自分が浅はかに感じるのだ。

「家は浄土宗だけどぉ、わたしは仏教は知らないし」

ふふふと有紀は笑った。けとれどもそれは、軽蔑の笑いではない。

「さ、行こうよ、みんな！」と促すのりっちの声が響く。「又始まりだぁぁ」

けれども友里菜は、生まれて初めて、真剣にチャプレンの声に耳を傾けていた。

―　信仰って……何だろ？　神様って？

ふと見ると、有紀が両手を組んで一心に祈っていた。友里菜は初めて、何だか有紀を尊敬したのだった。

27　いよいよ寮へ

27　いよいよ寮へ

叔母村越歩の家から、ミニのトラックが出発した。いよいよ、大学寮に入るのだ。

ピアノはそのままだった。寮にはピアノ室が無い。練習は、同じキャンパスに在る音楽室でやるのが慣わしだ。夜遅くまでやる為、一人一人の練習時間は細かく区分されていた。それを、音楽部の寮生一人一人が持ち、目を皿のようにしてその練習室に入る。練習室には、番号が付いていて、約２０室余りの二畳ほどの個室だ。

練習室は一応防音になってはいたが、近寄ると騒々しいことこの上ない。果たしてそんな所で練習が出来るのか、友里菜は不安だった。けれども、叔母の家で気を使い汲々としているよりは、確かにまだましかも知れない……。叔母の家から遠ざかるにつれて、心が晴れ晴れしてきたのは確かだ。見慣れた景色がどんどん過ぎ去っていく。新しい一ページ……ロマンチックに言えばそんな感じだ。

けれども、いよいよ寮が近くなってくると、奇妙な不安にも襲われる。今まで集団生活は友里菜はしたことがない。一人っ子の友里菜は、常に一人で居ることに慣れきっており、大勢の人達と一緒に寝起きしたのは、修学旅行ぐらいだ。

―　いいんだ。気にしない、気にしない。どんな女子達が居たとしても、今までは何とかやってきたし。だから今度だって……。

けれども、脳裏には「イジメ」「シカト」といった言葉が駆け巡る。その反面、友里菜はこの女子大を信じていたところがあった。まだ前期だけだが、このＦ女は独特の伝統と気風があり、どこかお

っとりしていることにも気付いていたのだ。
だからと言って、何事も無いと思うほど、友里菜も馬鹿ではないが。

寮の玄関には、のりっちが待っていた。というより、待ち構えていたと表現した方が良いかのように、目をキラキラと光らせて待機している。むしろ、その瞳はランランとしていたのかも知れない。
そしてこの間玄関口にチョコンと座っていた、例の三年生の芦田美香が、やはり同じ机に座っていた。そしてもう一人、体格のいい中年のオバサンが……。

「やー、来たかぁ、友里菜ぁ！」とのりっちが飛び出すと、そのオバサンはジロリと、けれども上品にこちらを伺った。友里菜を値踏みしているような、変な目付きで。
「友里菜ぁ……あちらは、寮長の長谷川先生よ。先生って言っても、何も教えて無いんだけどさ、一応寮長だから、ご挨拶してね」
「寮長！？」と友里菜は絶句した。確かに、寮には寮長が居るが、そこまであからさまに居るとは思わなかったのだ。せいぜい、それはテレビドラマの中にしか存在しないと思っていたが、どうやらそうではなかったらしい。
友里菜は、業者が荷物を下ろしている間、慌てて長谷川寮長の所に行くと、ペコリとお辞儀をした。
「新しく入る、一年の柿沢友里菜です。どうか宜しくお願い致します」
「新入寮生です、先生」と、芦田美香が事務的に言い換えた。「一年の音楽部生でございます」
「ああ、そうなの？　お待ちしていましたよ」
と長谷川寮長の言葉は馬鹿丁寧だが、どこか余り好きになれそうも無い感じの人物のようだ。
「ここの寮のマナーや仕組みなど、よぉくお教えしてね。それじゃ

わたくしは、この辺で」
　寮長は、至極丁寧にお辞儀を返すと、静々と廊下を歩み去って行く。けれども突如振り返ると、
「あ……柿沢さんと仰ったわね。ここは男子禁制ですから。お兄さんといえども、お父様といえども、この中には入れないことになっておりますのよ」と言うと、今度こそ離れて行った。

「な～んか、やっぱりどこか浮世離れしてるわ……この世界」
「なによぉ、弱気だね～友里菜ったら。直ぐに慣れるよ」
とのりっちはポンと友里菜の肩を叩いた。
　二人は思い荷物を抱えて、長い廊下を歩き出した。

「それはそうと、友里菜は北寮の二階の２０５号室。実はさ、本当は部屋は二人で使うんだけどぉ、友里菜は途中からだから、三人になっちゃったの」
「一部屋、三人！？」と友里菜は再び絶句。「聞いてないよぉ」
「だけどさ、仕方ないのよ。ここは一人部屋は無いの。ま、三人ってのも珍しいんだけど」
「巧く行くかなぁ」
「大丈夫よ！　ここはさ、わたしでも、イジメの話とか聞いたこと無いもの。今時、そんな場所滅多に無いわよ。ただし……」
「先輩後輩の礼はちゃんと、でしょ」
「その通り。それさえ守ってれば、何も起らないよ」
とのりっちはニタリと嗤うのだった。

28　ルームメイト二人

２８　ルームメイト二人

早速案内された北寮２０５号室には、二人の寮生が既に待機していた。慌しく明日の始業式の支度をしている最中で、格好は極めてラフ……というより、極めて普段着のいい加減な感じで、まず友里菜はそれに驚いた。

「こちらが、社会学部四年生の木川田樹理“様”、そしてこちらが一年生の英文科新居都子さん。樹理様は、金沢。そして新井さんは……確か、関西？」

「そうです、京都」と、目鼻立ちのはっきりした美人とも言える大柄な都子が、のりっちに告げた。樹理様は、側でひっそりと目立たずに立っている。

「音楽学部ですってね～。音楽学部の人達は、毎晩練習室に閉じ篭って、大変そう！」

とだけ樹理様は述べた。物静かだが、どこか得体が知れない風情だ。

「それじゃあたしはこの辺で。じゃ友里菜、ガンバ！」

のりっちは片手を振ってニコリと笑うと、さっさと出て行った。

この２０５号室は、思ったより狭い。とてもお嬢様学校の寮とは言えない狭さだし、両壁にある二段ベッドも如何にも古臭い。いや、レトロとでも言おうか……。その一つの二段目は開いてはいるが、もう一つには何やらごちゃごちゃとした物が置かれてあった。どうやら、物置といった有様らしい。よく見ると、漫画、本、ＤＶＤ、それからよく分からない物が山になっている。

「宜しくお願い致します」と友里菜はとりあえず、ペコリと頭を下げた。ジーンズにどう見てもよれた感じのＴシャツ姿の二人は、顔

を見合わせて少し笑った。
「堅苦しい事は抜き、抜き」と都子が言うと、友里菜から荷物を取り上げ、ポーンと開いた二段ベッドに放り込む。
「さ！　そこが新寮生の寝るとこ」
「はぁ」と友里菜は、ショックを隠しながら言う。正直言って、友里菜は二段ベッドになど寝たことが無いのだ。一人っ子だから仕方ないとは言え……先行きが思いやられる。
「部屋替えがあるから、今度はあなたも一段目に寝れるわよ」
と、慰めているつもりなのか、樹理様が静かに言った。

「わたしは、樹理様と呼ばれているけど、“様”には特別な意味は無いのよ。ま、伝統とでも言うかな～。それから、こっちはみやちゃんと呼んでるの。あなたは、ユリナさんだよね。いい呼び方、ないかな～？　ね、みやちゃん？」
「ユリナって、百合の花のこと？」と都子が聞く。
「いえ……友達の友に……」
「ゆりちゃんなんて、平～凡～」と都子が友里菜の言葉を無視して言った。「りりちゃんなんて、どうかな～、ね、樹理様～？」
その甘えたような言い方が、妙に新鮮だ。少し嫌味っぽいが。
「りりちゃんも、ちょっと変だわよ」と樹理様がのたまう。「ゆりでいいんじゃない？」
「リリーがいい！」と都子が快活に叫んだ。「ね、そうしましょう」
「あの」と友里菜が口を差し挟んだ。
「なに？」と二人。
「どうしても、、、、あの……呼び名がここでは要るんでしょうか？」
「まあ、大体ね」と言い辛そうに都子が答えた。

「あなたは柿沢さんね。カッキーはどうかしら？」
と樹理様がお上品に言うと、すかさず「さすが！」と都子が相槌を

打つ。
「それいいわ。それにしましょ。ね、カッキーっていいよね～」
「カッキー！？」と友里菜は目を白黒させた。「カッキー……ですかぁ」
友里菜が躊躇っているうちに、いつの間にか友里菜は“カッキー”という呼び方になってしまっていた！

それを翌日、始業式で有紀に話すと、有紀は噴出した。
「カッキーかぁ！　すごいあだ名！　でもいいかも。じゃあ、わたしもそう呼ばせて頂くわよ」
「ま、仕方ないかな～、それじゃあ、有紀は“ゆっき”でいいよね？」
「で、それから？」と有紀は畳み掛ける。
「夕食には、賛美歌歌うの。それから、アーメンと言ってから食べる」
「ふぅん」
「朝食は、パンと牛乳だけだった。それから各自、掃除当番があってさ」
「はー。聞いていると、何だか修道院って感じだね」
「そ、修道院よ。まさに、修道院！」
そう言ってから、友里菜はくすりと笑った。

「異世界だわ」
「でも、寮生はみんなそれに慣れているのよね」
「うん。でも唯一つだけ慣れない事が」
「なに？」
「夜になるとね……真っ暗なの。漆黒の闇よ！　みんな、勉強していてテレビとか無いし……休憩室にはあるんだけど、夫々の部屋には置いてないの。浮世離れしてるよね」
「もう根を上げたか」と有紀が言うと、友里菜は向きになって言っ

た。
「根を上げたりしてないよ。せいぜい楽しむ。だけどね～、叔母の時にも自由はなかったけど、今回も違った意味で自由が無いと悟ったわ、わたし」
それは真実だった。けれども、不思議と嫌な感じはしない。ルームメートの二人は、奇妙に優しかったし、規則正しい生活も又いいものだと、友里菜は感じ始めていたのだ。
ただし、各自ケータイをするときだけ、みんなどこかしら角や廊下に出て行ってひそひそ話し込んでいたのだけが、肌に合わないといえば合わない。プライバシーが極端に無い生活では、彼氏にかけるのも楽ではなかった。
よって、友里菜もその日はとうとう両親にも芳人にも、ケータイを掛けられなかった。

29　やけっぱち

29　やけっぱち

「畜生！　ちっくしょう！！」

道々芳人の罵り声が通りに響き渡り、帰り道を急ぐサラリーマンやＯＬ達が不審そうに眺めるのも知らず、芳人は尚も言い続けていた。

「おいっ、芳人、もうやめろや」となだめる淳平の言葉も聞かず、芳人は暗い顔をしたまま、ぶつぶつ悪態を付いていた。それは、不甲斐ない成績を取った自分自身にでもあり、更にはそんな自分をあしざまにクラスみんなの前で罵倒した高橋先生への憎しみもあるのだ。

それともう一つ、今朝病院から戻って来た母親の言葉も芳人を少なからず動揺させていた。

「なあ、芳人」と母親はいつもと変わらない声で、塾に行く芳人に向って言ったのだった。

「え？　なに？」

「あんなあ、ちと話があるんやけど……」

「なんや、早う言うて。もう時間がないんやさかい」

「わたしなぁ……どうやら転移してもうたらしい……」

「転移……！？　って、つまりガンが？」

「うん」と母親は何気に答えた。芳人は物凄い衝撃を受けたが、けれども顔色を変えないように努力しながら言ったのだ。

「けど……今すぐどうとかいうんやないんやろ？　すぐ死ぬとかじゃ」

言ってしまって「しまった」と思ったが、もう遅い。けれども、母親はいつものように、冷静にお茶を飲んでいた。

「まあ、ちゃうとは思うけど、もう一度精密検査やね、多分」
そう答える母親の背中が、急に老けた様に感じて、芳人は「なら、よかった」と心にもない言葉を発すると、逃げるように家から出て行った。

それなのに、よりにもよって数学の最低点を取ってしまい、クラスのビリケツになってしまうとは！　こんな有様では、国立どころか私立の医大も危ない……というか、かなり無理っぽいではないか。
「なぁ芳人、芳人は数学は悪いけど、あとの二科目は上の方やんか。それにまだ秋だし……って、こんな事言うても慰めにはならんやろうな～」
と淳平は芳人の代わりに溜息をついた。そういう淳平だって、余り良い成績とは言えないのだが、それでもどこかの私立医大には通れそうなのだ。

「お前んとこは、金が唸っていていいよな」と芳人は言いたく無いことまで親友に言ってしまった。
「唸ってるわけじゃないよ」と淳平も不機嫌になる。
「てか、今日のお前、少しおかしいよ」
淳平は、勘だけは鋭い。
「カノジョを待たすのが嫌なん？」
「それだけやないって！」と芳人はがなった。と言うか、悲痛に叫んだ。
「それだけじゃない？」
「つまりな……あの……おかんが転移したって、そう言っていた……」
「転移かぁ」と淳平は鸚鵡返しに言う。「って、どこの部位に？」
「知らん」
「知らんって、そんなことぐらいちゃんと聞けよ。部位によっては、

大したこと無いときもあるし、反対にやばい時もあるから」
そういう淳平は、如何にも医者の息子だ。
「そうやな……俺って、なんか焦ってたわ。気持ちが落ち着かんでな。医者になるつもりの人間が、すぐに動揺するなんて」
「分かるわ」と淳平は同意する。そして優しく言い添えた。「他人じゃなく身内がなるとそうなるもんやて、そう父も言ってた。理性的にはなれへんって。どんな名医でも」
芳人は「そやな」と呟きながら、小柄な淳平の肩を叩いた。良い友達を得て良かったと、今改めてそう感じる。
「やけになったらあかん。自分の負けや。そう言うのも、僕のおかんとはちゃうからかも知れないけどな」
「俺、勉強する。猛烈に勉強する。それまでは、友里菜には会わん」
「欲しがりません、勝つまでは、かぃな」と淳平は微かに笑った。
「今はただ、お前のおかんを支えることしかないやんか」
「そやな……淳、おおきにやで」

そう言いつつも、芳人は来年の入試が失敗に終わるのではないかと、恐れていた。二人の女性に……一人は愛する友里菜、もうひとりは尊敬する母に対して、申し訳が立たないと妙に律儀に感じていたのだった。
「それにしても、母は強し、やな。平気な素振りで」
「きっと、心の中では泣いてるし不安で一杯やと思うよ。けど、母親ってのは、息子には弱みを見せへんものとちゃう？」
自分よりも、淳平の方が大人だ、と芳人がそう確信した瞬間だった。

30　秋の調べ

30　秋の調べ

明治の有名な建築家が建てたというキャンパスも、既に銀杏並木が黄色や朱に変わり、古びた風情の趣きある図書館の窓から、ハラハラ落ちる落ち葉が見える秋。

「何、ボーっとしてんのよ」と有紀が友里菜に声を掛けた。前期試験が全て終わったその日、友里菜は脱力感なのか、食堂の窓辺に陣取ったのはいいものの、ぼんやりと外を見ていたのだ。

「あ、ゆっきか……」と友里菜は目が覚めたように、有紀を見上げた。この頃二人は大体いつも一緒。違うクラスで授業があったり、試験が別々であったりしても、結局は食堂の同じ席で共にランチを食べるのだった。

それから、お決まりのお喋りが続き、有紀が帰宅する直前まで、いつも一緒だ。それがずっと続いて行くことを、今の二人は知ろうはずが無いが……。

一見高慢ちきに見えた有紀は、実はナイーブな神経の持ち主であり、頼りがいのある生徒だった。人は見かけで判断してはいけない、と言う典型だ。

その上、有紀と友里菜は共に一人っ子。一人っ子しか分からない微妙な心の襞を持っていることは、お互い何も言わなくても分かる。見た目はかなり違う二人だが、絆だけは深くなっていく一方だった。

そういうわけだから、友里菜は時々男子がうざいな～と感じることが多くなった。女子だけの気楽さは、多分“タカラヅカ”もそうなのかも、とふと思う。

「秋だからメランコリーになったってか？」

「まさか！　だけど、少しはそうかな～。でも違うの。ねぇねぇ」と、友里菜は昨晩、K大生の大滝洋平からお茶の誘いのメールがあった事を告げた。
「で、どした？」
「うん、約束しちった」
「カッキーはもてるからなぁ」と有紀は正直に言う。「大坂に居る医大を目指している幼馴染でしょ、それから、美形の美術部の男子、そして今度はK大生。み～んな、女子の憧れのような人ばかりじゃない。
　でも、気をつけてね。二兎を追うものは、いや、三兎を追うものか？　ま、どっちでもいいけど、結局皆に逃げられたりしてね。ふふふ」
「かもしれないなぁ、あたしって全然悪女でも何でもないのにさ、なのに、何だか断りきれないの、みんな」

「ファム・ファタールって言うのよね、それ」と有紀は物知り顔で言った。
「わたしはファム・ファタールなんかじゃないわよっ」
「うん、一見清純そう。でもその裏に潜む悪女の素質、きっと友里菜は持っているんだわ」
　有紀は悪戯っぽく言った。
「で、どこに行くの？」
「多分、宛て無し」
「いいよいいよ、どこでも行きなよ～、いいないいな～。わたしは日曜日は教会だもん」
「教会かぁ」と友里菜は両手で顎を支えながら、上目遣いに有紀を見上げた。
「一度は行きなよ、カッキー。ま、オジサンとオバサンと老人達しか居ないけど。時には、若い奴も居るけど……でも、あんまり魅力はない奴らばかり」

そう話す有紀は、ふと聖女に見えたりする。

「女子大のチャプレンの話で充分、と言いたいけど、でもいつかは行こうかな」

と友里菜は本気で答えた。けれども、実行するのはまた別の話だ。一体、いつになるやら……。

ふと友里菜は、誰かが弾いたショパンの曲を口ずさんでいた。

「あ、それ！　ノクターン！」と有紀が当てる。「ノクターンにも色々あるけど……わたし、それ好きだな。余り有名じゃないけど、秋にピッタリで」

「うん、侘しい感じだものね。今度弾きたいな」

二人は確実に音大生になっていた。

「じゃあ、明日のデート、ガンバ！」

「何を頑張るのよぉ！？」

「うっふふふふ」とだけ有紀は笑っただけだった。

なぜかそれ程ウキウキもせずに、寮に戻ると、ルームメイトの樹理様が変な素振りをしている。もしかして……お払いの格好？

「あ、お帰りぃ。明日の夜、暇？」

「あ、はい。いいえ！」

「どっちなのよ、一体」

「いいえ、です」

「そっか、それは残念だね～」

「え？」

「あたしさ、明日秋祭りの巫女のバイトするの。ほら。この近くの神社で。へぼい神社だけど、もしかしたら来てくれるかな～とかって」

「神社のバイト！？　巫女！？」と友里菜は我を忘れて叫んだ。

「なんかおかしい？」

「いえ……別に、ってかおかしいですよ！　だって、ここミッショ

ンだし」
「関係ないの」と樹理様は、あっけらかんと言う。「バイトだもん。それに一度、あの巫女の衣装着たかったし」
「でも、神社もよくミッションの女子大生を雇うんですねぇ」
「日本ってそんな国なのよ、あははは」
やはり、日本は一神教にはなれないかも知れない、と友里菜は思う。そしてクリスチャンの有紀と、多神教の巫女姿の樹理様を想像して、思わず苦笑していたのだった。

31　ストーカー君？

31　ストーカー君？

K大生の大滝洋平とは久し振りに会った。如何にも育ちの良さそうな男子で、それ程のイケメンではないし、その上小柄で友里菜と歩いているとどっちが背が高いか分からないほどだ。

友里菜は結構気を使って、その日はローヒールの靴を穿いた。そしてちらっと、洋平がひょっとして、シークレットブーツでも穿いて来たんじゃないか、と足元を見た。けれども、洋平は普通のスニーカーで、特別背丈を気にしている風でもない。

……と見たのは、実は友里菜の浅はかさだったのだが。

「やあ、久し振り！」と先に来ていた洋平が手を挙げた。どうにも気障なメガネをかけ、服装もお洒落だ。品もいい。けれども、ときめかない……。

「僕のこと、もう忘れたのかと心配していた。だって、君って結構可愛いからね～。他の男子が放っておくはずが無い、と思ってさ」

「い、いいえ、まぁ……。でも、ほんと、お久しぶりです」

と友里菜は言葉を濁す。

「ごめんね……理系って結構忙しくてさ。でも……僕だけじゃないよね、デートしてんのは？」

「はぁ？」と友里菜はキョトンだ。この洋平のトーンには、どこか付いていきにくい。見た目、爽やかな男子なのに、どこかが……変？

「ええ、まあ、そうかな。一応、今はまだフリーってことで」

「なの？　実は、関西に待ち人が居るんじゃない？」

と洋平は一瞬疑りぶかそうな目つきになった。けれども直後、洋平は朗らかに、

「じゃ、行こうか」と言ったのだった。

けれども、K大学というのは、やはり魅力だ。姫路出身と言うが、恐らく素封家のお坊ちゃんか、大切に育てられた良家の息子さんだろう。K大学に行くというのが、そもそも関西人なのに関西の大学に行かないという、というより行かせないという親の気持ちがあるし、多分お金も有るに違いない、と友里菜は皮算用していた。

自分が、一瞬、卑しいタヌキになったように気がしたが……。

とにかく、デートは一応は楽しかった。若者の行きそうな所に連れて行き、小洒落たイタリアンレストランに連れて行く、というのは合格点だ。

けれども、友里菜が食事の後にトイレから戻って来ると、洋平がさぁ～っと何かを差し出すではないか！　紙切れ、それは……？

「あれ、何？　これって」

「あ……詩です、詩」

「し？」

「散文詩、ですよ」

「ああ、詩ね」

「あなたのことを書いたんです。読んでくれます？」

「わたしのこと？　へえ」

と友里菜は何気なくその紙切れを取ると、読んだ。そして……どん引いた。

「あれぇ～、わたしって、文学の才能ないんかな？　この中味、よく分からないんだけど」

「そうですかぁ？　芸術家なら分かると思ったんだけどな」

と残念そうな洋平がその紙切れを取ろうとしたので、友里菜は慌てて言った。

「いいのよ、わたしそれ頂く。芸術家、じゃないけど」

「そうですか！」と洋平のうわずった声。「じゃそれ、取っといて下さい」
「え、ええ」
友里菜は無理やりほほ笑むと、そのキモイ詩の書かれた紙切れをバッグに入れた。

結局何事もなく洋平とは別れたが、どこかしっくりこないままだ。
寮に戻ってその紙切れをルームメイトのみやちゃんに見せると、みやちゃんこと都子はケタケタと笑いこけた。
「あああ、腹が痛いっ。今頃こういうの書く人が居るなんてね」
「何笑ってんのよ」と言いつつ、部屋に入って来た樹理様は、いつになく神妙な顔でその詩を読んでいたが、友里菜にそれを付き返した。
「捨てた方がいいかも」
「え？　この詩を？」
「違うわよ、この男を」
「大滝君を……」と友里菜は呆然。
「樹理様〜、何でなんですか？　この人、変態とかって？」
「違うわよ。けどさ、言っておくけど、こいつストーカーとかになりやすいタイプだと思うわ、あたし」
「で、なんででしょう？」と友里菜が聞くと、樹理様はニヤリと嗤った。

「神のお告げよ、神の」と厳かに告げた。
「はは？　バイトのやり過ぎじゃ……」と都子も呆気に取られる。
「あんた達、まだまだ甘いわね〜」と樹理様。
「ま、いいから、お土産あげるぅ」
「ええっ、お土産っすか？　何ですかぁ」と二人は色めきたったが、目の前に差し出されたのは……。
「林檎飴、ですかぁ」と、毒々しい色の林檎飴を都子はそれでも恭

しく持った。実は友里菜は生まれて初めて食べるのだが。

「美味いっ！」と友里菜は叫ぶ。

「何でこんなのが美味いの？」と都子。

「今日男子と食べたイタリアンより、美味いッ！！」

「まじかよ」と都子は呆れ、樹理様はご満悦になった。

こうしてバカバカしいが、洋平とのデートの日は終わった。けれども、それは果てしない“終わりの始まり”でしか無かったのだが……。先輩の言葉はよく聞くべきだったのだ。

32　初めてのクリスマス

32　初めてのクリスマス

毎日、洋平からメールが来るようになって、友里菜は憂鬱になり出した。最初は律儀にレスしていたが、その内に大したことでも無いことまでメールが来て、レスするのも面倒臭くなる。その内に、憂鬱から少し気色悪くなってきた。

その中に、芳人からのメールがあると、友里菜はやはりほっとしてしまう。年月というものは、そう簡単には裏切らない信頼を築くのだ。

文面とは違い、芳人は悩んでいた。志望校を変えることが、である。

相変わらず数学のテストは散々で、遂に芳人は余り好きではない兄貴の雅人にまで頭を下げて、数学を教えてもらうことにした。

三つ違いの兄雅人は、既に大学四年生。来年からは大学院に進むことが決まっていた。悔しいが、やはり雅人は秀才である。数学や英語など、まるで幼稚園児に教えるかの如く、一から丁寧に指導した。

けれども、他人よりも始末に悪いのが、親や兄弟の間柄だ。雅人は容赦なく、怒鳴り散らし、叱り飛ばし、芳人の神経をズタズタに傷つけ、そして蔑んだ。そんな過酷な時間を乗り切り事が出来たのは、やはり入院している母親のことと友里菜からの変わらぬメール、そして淳平の熱き友情だった……かも知れない??

「ちっ、兄貴の激励だか、残酷だか分からん叱咤にも耐えられるんは、やっぱお袋のことがあるからかもなぁ〜。毎回見舞いに行く度

に、廊下を通る医師達や看護師達を見ていると、自分もその仲間に入りたい、いや、絶対に入るんや、と思うもんな。
でも医者って、入るのもしんどそうやし、なるのも大変。で、なってもうても、またまたしんどい職業みたいや。どうするよ、芳人？　やっぱり、挑戦してみるか、二度目の？　で、又落っこちたらどうするん？」

あれこれ思案しながら、いつものアーケード商店街を歩いていると、どこかから流れて来る静かなクリスマス・ソング♪　ふと、友里菜の面影を追う自分が居た。
「今頃、友里菜、どうしてるかなぁ？　来年の春、胸を張って『俺、受かったぞぉぉぉぉ！』って、言えるんかな……。あ～あ、なんか心細ぅなってきたやんか」
と、とぼとぼ歩く芳人だった。

一方、友里菜の方は絶好調で青春謳歌だった。
相変わらず、洋平からのメールはしつこい程だったが、それ以外は何事もなく過ぎて行った。
先輩達は、一人一人、学内ソロリサイタルを開き、そのコンサートの観客の出席人数によって、人気と実力が分かる、と言われている伝統的なイベントだったが、けれどもそれは、一方では『卒業論文』に当たるのだった。だから、四年生はこの時期、遊びどころではなく必死で練習し、完成した者から順番に学内コンサートを催すのだ。
友里菜と有紀も又、一緒に先輩達のコンサートを聴きに行っていた。

ある時は、観客が溢れんばかりの時もあり、ある時は閑散としている時もある。どちらが圧倒的に下手だとか上手とかではなく、それは運や成績以外の事でもあることを、二人ともまだ理解していな

かった。
とにかく一年生の今はただ、冷やかしに行くだけだったのだ。
「ねぇ友里菜……うちの教会、一度クリスマスに出席しない？　今年（１９９９年）は、クリスマスが生憎土曜日なんで、日曜日の１９日がクリスマスとなってるの。だから、カッキーもまだ大坂には戻っていないんでしょ？」
「え……多分ね」と友里菜は曖昧に答えたが、心の隅では、一度は教会に行くべきなのかな、と考えていたこともあったのだ。
他人には誰にも言わなかったが、この頃友里菜は真剣に、“死”というものを考えていた。それは、親しかった祖父を亡くしたこともあるだろうが、芳人の母親の病気が再発したということもあった。芳人からのメールで、他人の母親なのにどこか愕然としたのだ。
なにはともあれ、身近な人達の死や病と言うものは、友里菜を少しは大人にする。そして親友有紀の誘い。

「クリスマスはお祭りじゃないというけど、でもお祭りなの、やっぱり」
と有紀は意外なことを言った。「偉大な人が誕生した日ですもの。でも、その日に生まれたわけじゃないんだけどね」
「キリストは飼い葉桶の中で……って、チャプレンが言ってたよね～」
「ふふふっ、実際に飼い葉桶の中で生まれたかどうかさえ分からないんだよ、友里菜って結構信じてるんだ～」
「じゃ、東方の三博士が来たってこととか、羊飼いが拝みに来たとかも？」
「それは伝承よ」と、呆気なく有紀はのたまった。
「第一、マルコとヨハネの福音書には、クリスマスの事なんか載ってないもの。それに、記述すらないし。でも、わたし達って、その伝承の中でもいいから、救い主の誕生を願って、そうした綺麗な物

語の中に浸りたいんだと思う」
「至極、当然」と友里菜は相槌を打った。

「よし！　今回は行って見ようかな。次の日に戻るつもり」
「そうか～、嬉しいな」
「昔、芳人とルミナリエに行ったけど、それでもいいのかしら？」
「お祭りはお祭り、堅いこと言わなくていいのっ。だからカッキーって、真面目すぎるって言うんだよ」
「なんだぁ、真面目で悪かったね」と友里菜は言ったが、けれども幸福感に包まれていた。ただし、その日しつこい洋平からの誘いがあるとは露知らずにいたのだが。

33　思いがけなく…

33　思いがけなく…

何度目かの見舞いに病院に行くと、手術後も順調な母の様子が今日は少し変だった。窓からは、寒空がのぞき、もうすぐ冬の気配がする。

「あら、もう来たの？　早いね～、勉強は順調に進んでるのん？　雅人のことだから、あんたを凄く叱ってるんでしょうね」と、見てきたように言うが、その通りなのだから仕方ない。

「うん、まぁな」

「ねぇ、今日は良いこと言うよ」

「へえ？　病気はかなり良いみたいだけど。退院のこと？」

「退院は、１９日。でもそれじゃあなくて、あんたの進路のこと」

「ああ……進路ねぇ。又落ちたら、今度こそ、『もう、諦めやー』とか言うんやろ？」

「違うがな、おかしな子」と母は言ってくすりと笑う。その笑いが永遠に続いて欲しいと、ふと芳人は切なくなった。

小さい頃から常に兄雅人と比較していた父とは違い、母親は常に自分の味方だった。どんな時にも、その柔らかな微笑みを絶やしたことが無い。このような、大変な時でもだ。

「何だよ、お袋」

「最近、あんた、お袋って言うんやね～。芳人も大人になったもんだわ」

「だ～か～ら、何だよ、良い事って」

「芳人なぁ……私立を受けてもいいねんよ」

「ええっ！？　私立って……でも……凄いお金、要るんやで」

と芳人は四人部屋の病室だというのに、素っ頓狂な声を上げた。
「知ってるがな」と相変わらず母は笑っている。
「お父さんと相談してん。あのな、わたしの保険金も入るかもしれんし、思い切って田舎の土地売ってって、な」
「でも、あの土地……老後資金の為に取ってるって言ってたやろ？　それに保険金ってなんやの！？　お袋の保険金なんか要らん！　それって、生命保険なんやろ？　お袋が死んだ時に出るお金やろ！」
思わず、芳人はカーっとなった。

「保険金とか要らん！　そんなもんより、お袋の命の方が大事や！」
「ありがとさん」と母は静かに微笑んだ。「それは嬉しいけどな、まぁ、万が一って感じで言うただけやんか。とにかく、休耕田があるんなら、それを役にたたせた方がいいと思っただけやよ。深く考えんでもいいねん。あんたはちゃんとした医者になったら、いいねん。それだけで、わたしは嬉しいねんから」
芳人は暫く声が出なかった。ありがたいような、悲しいような、悔しいような、複雑な思いに捕われていたのだ。自分の頭が悪いからそうなるんだと分かってはいても、そして、両親の痛いほどの気持ちを信じてはいても、それでもどこか納得行かなかった。

「本当に……いいの？」
「当たり前やんか。親がしてやれるのは、もうそれぐらいしかないねん。お父さんも、分かってくれたわ。だから心配せんと、私立も受けや。私立やったら、どこか受かるんやろ？」
この最後の母の言葉は、芳人の誇りをちょっぴし傷つけはしたが、「うん、それやったら何とか」と思わず本音を言ってしまう芳人だった。
「関東でもいいのんよ」
「え？」と芳人は再度驚いた。母は、友里菜のことを知っているんだろうか……。

「いや……医大なら関西にするわ」と言うだけで精一杯だ。これ以上、お金を自分なんかに懸けさせる訳にはいかないという気持ち。
「良かった」と安堵したような母親の声が、耳元の背後でしたような気がした。

病院から出た芳人は、最初努めて元気そうに明るく振舞っていたが、急に足が止まった。
「おかん……俺、頑張るからな。兄ちゃんには負けへんからな。見ててや。そやから、長生きして～な！」
鼻の奥がツンとした。

その頃、友里菜は真っ先に美術クラブの部室に入った。誰も居ないはずが、誰かが振り向く。
「あっ！」
それは洋平だった。
「ここは女子大だよ、大滝君」
「いいじゃん。堅いこと言わないでよ」と事も無げにサラリと言う洋平の姿に、友里菜は戦慄を覚えていた。

34　何とかしてよ～！

34　何とかしてよ～！

のほほ～んと、女子大の部活室に鎮座している、他大学の学生、大滝洋平に唖然とした友里菜。

「ったく！　なんて厚かましい人！」と友里菜は心の中で憤慨したものの、けれどもそこは、“お嬢様”。下品な悪態なんかつけない。

「ちょっとぉ、ここの門、どうやって通った！？」

「門って正門のこと？　まっさか！　僕が通ったのは、裏々門」

と、いけしゃあしゃあと述べる洋平。

「裏々門って！？」と友里菜は、今にも湯気が立ちそうなほど怒り狂っていた。もちろん、微塵もそんな素振りは出さないが。

「あ、知らないの？　男子なら誰でも知っているよ。裏門の近くにある、もう一つの秘密の門のこと。そうそう、寮に近いから君、知っとくといいよ。何かで門限に遅れた時に、こっそりそこから入ればいい。今度教えてあげる」

「そ、そんなの、必要ないっ！」と友里菜は思わず感情的に叫んでいた。

「怒った君もまた良いもんだな」と洋平は本性むき出し。見た目は、どっちかと言うと爽やかなのに、男子と言うものは全く理解不能だ。

「とにかく、一体何の為に来たのよ」

「決まっているじゃん、君に会いに、さ。ケータイやメールだけじゃ、つまらないもん。それに」とそう言うと、洋平はズボンのポケットから、何やら取り出した。

―　来た来た来た～～～～！！　まさか、又例のへんてこりんな、

詩とかぁ！？

「君に読んで欲しくて」

―　やっぱりじゃん。とほほほ。

友里菜は不貞腐れたように、その紙片を取って一応読んでみた。相変わらず、陳腐な文章が並んでいる。字は自筆のようだが、変に丸字で、まるで高校生の女子の字面だ……。

「ふぅん、、、、、読んだよ。返すね」

「あ、それはさぁ、君に捧げた詩なんだから」

「わたしに……捧げた！？」

―　うおおお！　時代がかってるぅ！　こういう男子は、どうすりゃいいのさ？

「じゃ、一応貰っとくわ」

「ねえねえ、もう直ぐ戻るんだろ、君」

「そりゃ、年末だもん」

「ねぇ……僕も姫路で関西だから」

「だから？」

―　まさか、こいつ……？

「一緒に新幹線で戻るってのは、どうぉ？」

―　げー！　来たよ来たよ。やだやだやだ。

「だけど、わたし達そこまで親しくないもん。ちょっと考えさせてくれる？」

「ただ僕と一緒っつーのが嫌なの？」
「いや……つまり……わたし……（そうだ！）……大坂のカレシが多分駅で待っていると思うんだ。変に誤解されたくないのよ。大滝君とはただのお友達でしょ。でもそいつはさぁ、一応カレシだから」
洋平の顔色が少しだけ変わった。元々ペールグリーンのような、生白い肌なのだが、それがもっと白くなっていったような……。

「そっか」
「うん、そう。ごめんね」
「けど、僕は諦めないよ、柿沢さん。そのカレシって、まだ予備校生とか言ってたよね。まだまだ先の分からない小僧っ子じゃん」
「でも！　……医大を受けるって子なの！」と友里菜はムキになった。
「ふぅん。君は、医者とかに興味あるんだ。大体、女の子って医者とか弁護士とか、そういうのにコロリと参るもんだからね、君も例外じゃ無いってわけか。ま、F女はもともとそういう校風だけどさ」
―　な～んて、嫌味な奴っ。芳人が医者になるから好きなんじゃないのに！　医者なんかにならなくても、昔から好きだったんだから。

友里菜が何か言おうとすると、運のいいことに他の部員が入って来た。そして、やっぱり唖然として入口に立ち尽くしている。
「え？　どなた？」
「ごめん、わたしの友達。でも今帰るって」と慌てて取り繕う友里菜。
「そう、これから帰るとこだから、安心して」
相変わらずしゃあしゃあと言い放つと、洋平は立ち上がり、ドアからさっと消えた。
友里菜は、樹理様が言った「その人を、捨てるのね」と言った言葉を思い出していた。

35　勝負の前に

35　勝負の前に

友里菜は有紀の教会の礼拝には出なかった。けれども、大学内では幻想的なツリーの点灯式があり、一足早いクリスマスの賛美歌による小礼拝があった。そういうイベントが初めてな友里菜は、「ああ、これがホンモノのキリスト教主義大学のクリスマスなのか」と感じたのだった。

その後、友里菜は久し振りに新幹線に乗り、「のぞみ」で大阪に向った。もちろん、大滝洋平と一緒ではない。けれども友里菜は、新横浜でキョロキョロと周囲を見回した。どこか洋平が不気味で、ホームのどこかに居るのではないかと不安だったのだ。
折から、『ストーカー、若い女性を刺す』という新聞記事を読んだばかりだったからだ。
「まさか……だよね」
友里菜は独り言を言うと、新幹線に乗り込んだ。その途端、メールが来た音！　ぎくりとしてケータイを見ると、
「今から大阪に帰るんだね。気をつけてね」と言うメールがあるではないか！　送った人間は……大滝洋平！！
「まじぃ！？　こわ～～」
偶然だと思いたいが、それでもやはり不気味だ。けれども気を落ち着けて座ると「のぞみ」はあっという間に新横浜を出発した。

乗っている間中緊張していたが、友里菜はいつの間にか意義他なく寝てしまい、気づいた時には既に京都だった。
乗る前まで標準語、降りる時には関西弁、といつの間にか友里菜は日本語の“バイリンガル”が身についてしまったようだ。いつもよ

り雑踏の激しい新大阪から、友里菜はちっよぴり懐かしい我が家へと向っていた。

その頃、芳人は塾へ急ぐ途中で、メールの音に気付き直ぐにケータイを覗くと、

『今着いたとこ　友里菜』とあり、思わずニヤニヤしてしまう。友里菜が、自分が知らない間に、他の男子とデートしているのも知らず、相変わらず純真な芳人は……と言うより、他人を疑うヒマさえない浪人生の芳人は、医大の出願の日を迎えていた。今日は、その確認の面接があるのだ。

「いかん、いかん、デレデレしても、友里菜には会えへんぞ。もう直ぐなんやからな、入試は。けど、２０００年に入試やて、なんか、世紀末という感じやなぁ～」

「芳人っ」と突然背後から呼びかけられて、塾の階段を登ろうとしていた芳人は、その覚えある暖かい声に振り向いた。

淳平がへらへら笑って、立っていた。

「なんや？　なんか、嬉しそうで。なんや良いことあったんか？今日みたいな大切な日に？　あ、ひょっとして、カノジョ戻った？」

「うん、まぁな」と芳人は照れて、慌ててケータイを仕舞う。ずんぐりした、まだスタイリッシュとは程遠い形の頃だ。

「良かったよ、芳人と同じ私大の入試が出来て。親父さん、随分無理したやろ？　うちの父なんて、子供の頃から『私大入試用資金』と銘打った貯金してててんから。準備いいよな～、それに『私大用』っつーのが、なんか気に食わんけど、でも息子の頭の程度をその頃から考えとったんは凄いわ」

「妙な誉め方！？」と芳人は茶化した。

「でもな、淳平、僕な……私大でもどこか不安やねん。なんか自信ない」

「自信ないのは、誰でもや」と淳平は言った。「二浪、三浪なんて誰だってしたくない」
「医者になるなんて、そんな無茶なこと言った罰やな」
と芳人は気弱に呟く。
「とにかく頑張らなしゃーないやん。もうジタバタできへんで」
そう明るく言って、淳平はポーンと芳人の肩を叩いた。
「絶対に二人とも受かろうや！」
「うん」と芳人は勢いよく応えたものの、その実……。

けれども、それまではまだまだ序の口だった。
鬼の高橋と言われている、例の数学教師、高橋先生との面談では、芳人はコテンパンにやられたのだった。
高橋先生は、片手でボールペンをクルクル廻す癖がある。そして苛々するほど、そのスピードは速まるのだ。
芳人が先生の前に座った時、そのスピードは頂点に達していた。
「大久保かぁ」と先生は素っ気無く言うと、上目遣いで芳人を眺め回す。
「あのな、大久保。私大に決めたんは正解やった。この点では到底国立は無理やからな。けどな、私大を舐めたらあかんのや。これで入れるとでも思っとるんかあ、大久保！」
「だ、ダメですか……」
高橋先生は、ボールペンを目にも止まらぬ速さで廻しながら言った。
「ま、五分五分ってとこかな。二浪も覚悟しとけよ」
芳人は愕然としながら、重い足取りで家路に着いた。
友里菜から来た『正月は会おうよ』という嬉しいメールも、芳人の気持ちを明るくはしなかったが、ただ一つの光明は、年末に母親が退院したことぐらいだった。

36　誓い

36　誓い

結局、大晦日まで塾に缶詰になっていた芳人は、友里菜とは正月の二日に会った。

その日友里菜は、出来上がったばかりの振袖を朝早くから着せてもらい、少しドキドキ、幾分ルンルン気分で芳人の家に出かけた。

確か、訪問は初めてのような気がする。中学時代に住んでいた町なので、何度も見ていたし、大学前に一度訪問した家なのに、いざ再び門をくぐるとなると、おっかなびっくりになる。

けれども、暖かい微笑の芳人の母親に救われた気がした。どこが重大な病気なのか、外見からは全然分らないのだ。いや、分らなく振舞っているのかも知れないが……。

「あの……わたし、お約束していた柿沢……」

「友里菜さんね」と芳人の母親は言い継いだ。

「おや、早かったやんか～」と母親の背後から、のっそりと芳人が現れた。もう既に外出の格好だ。

「じゃ行って来る」

「あら、お茶でもどぅお？」と気の良さそうな母親は言うが、芳人は照れたように慌てて外に出たのだった。

そして今度はびっくりして、目の前の振袖姿の友里菜を見つめた。

「ありゃ～、すごいなぁ！　もうすっかり……」

“女やなぁ”と言うのを、芳人はぐっと飲み込んだ。

「じゃあそれでは、、、、」と友里菜はなにやらもぐもぐ言いながら、丁寧にお辞儀をして芳人と共にその家を後にした。

角を曲がった途端、芳人は堪えていた情熱のはけ口を手に全て込めたかのように、友里菜の手をぎゅっと握り締めた。
「なんやぁ、友里菜が着物着てくるなんて、早う言うてくれてたら、僕もちっとはマシな格好するのにな」
「芳人はどんな格好でも、いいんよ」と友里菜は芳人を見上げた。今は“下町のプリンス”も“ストーカー君”のことも忘れ果てていた。
「にしても、今日の友里菜……なんや見違えたわ～。綺麗やなぁ～、大和撫子やなぁ」
「何言うてんの」と友里菜は握られていない方の手で、芳人をぶったたく。その感触の硬さに、ふと『芳人だって、もうれっきとした男じゃないの』と感じる自分が居た。

二人は京都の河原町から、八坂神社、そして参拝人で身動きできない清水寺に行った。
「な、芳人、おみくじ引く？」
「おみくじ？　なんか嫌やなぁ～」
「じゃあ無理せんどいて。わたし引くけど」
友里菜が引いたおみくじは『小吉』だった。
「あ～あ、まあ今年もこんなものかな～」と溜息をつく友里菜を見ていると、芳人は急に自分も引きたくなってお金を払う。けれども、それが芳人の大後悔の一つとなったのだった。

「あ！」
「なに？」
「『凶』や……」
「ええっ！？」と友里菜は叫ぶと、「いいのよ、わたしそれをあの木に結わえ付けて、厄落しするから」と芳人からそれを引ったくり、素早く近くの木の枝に結びつけた。その木や隣の木には、無数の白いおみくじの紙が結ばれている。

それから友里菜は結びつけた『凶』のおみくじをパッと下に落とした。
「さあ、もう大丈夫」
「けど、なんや嫌な感じが残るなぁ～」と芳人はそれでも気になっていた。
「もう直ぐ入試やのにな。引かなきゃ良かった」
「なんやの、男らしくない！」

そう言う友里菜と共に、芳人はうどんを食べた。そのほかほかした昆布だし入りの醤油の汁の匂いが、やっと芳人を落ち着かせた。
「なぁ友里菜」と芳人は言い始める。
「なに？」
「僕、誓うことがあるんやけど……聞いてくれる？」
その真剣な瞳に、友里菜はハッとして箸を置いた。
「うん」
「今度の入試は絶対に失敗できへんのや。でももしも、もしもやで失敗したら……」
「……したら？」
「僕……成功するまで、友里菜とは会わへんつもりなんや」
「え」
友里菜は絶句した。

「そんな、、、、弱気でどうすんのよ」
「いや、そやないて。そうじゃなく、ほんまやねん。それぐらいに真剣にならへんと、僕は入試に臨めんのや。分るかな、友里菜には？　友里菜は遠くの女子大で、青春謳歌しとるんやから、分らへんかもしれんけど」
そう言うと、芳人は袂（たもと）から出ている友里菜の白い手の上に自分の分厚い掌をそっと置いた。
「誓わせて欲しいんや」

友里菜はじいっと芳人の目を見つめた。そのそんなに大きくは無い目は、けれども必死さと、幾ばくかの哀しさが宿っていることに気付いた。
「分った」と友里菜はキッパリ言う。「でも、そんなことは無いと思うわよ、わたしは。気ぃをしっかり持ってね。祈ってるから」
芳人は無口だったが、首を微かに何度か下げた。

37　我が麗しのディーバ

37　我が麗しのディーバ

芳人との正月デートは甘辛かった。

友里菜は芳人の真剣な誓いを胸に、横浜に戻って行った。そこでは、相変わらずF女の奇特な面々が居るべき場所に鎮座しており、友里菜はどこかほっとしたのだが。そしてその内に、友里菜は芳人のことも忘れ、自分の期末試験の方に没頭していった。

期末試験が、ペーパー、実技共に無事終了した頃（とは言っても、友里菜の成績はそれほど良いとは言えなかったのだが）、久し振りに芳人からメールが来た。そこには、ただ一言、「全滅」という文字だけが打たれてあり、友里菜は大いにショックを受けた。

絶対に今度は受かるはず、と思い込んでいただけに友里菜の失望は大きく、又芳人本人の絶望感はいかばかりか、と想像するだけで胸が塞ぐ。再び医大にトライするのだろうか？　もしもそうなら、二浪ということになるが、どちらにせよ辛い選択には違いない。

芳人は馬鹿では無いが、ペーパーテストに弱いところがあるかも知れない、とは友里菜は中学時代から思っていた。いわゆる“秀才”ではないのだ。けれども、医者になるには、ただ秀才だけではダメなのも確かだ。志、心、技も必要で、何より患者にとって、暖かい医師でなくてはならない。そういう点では、芳人はピッタリだと思うのだが……如何せん、やっぱり試験は試験。通らなくちゃ、意味が無い。

友里菜は、さぞ母親がガックリしているだろうと察したし、秀才の兄のイライラぶりも感じていたせいか、どういう言葉をかけてよいか分らず、ケータイをもてあましていた。掌で転がしながら、言

葉を選んでいたところ、着メロが鳴った。
「大滝洋平！　うっぷ！　何だよぉ」
渋々耳に当てると、
「柿沢さん」という例によって甘い囁くような声が聞こえる。
「はい、わたし」
「どうして知らせてくれなかったの！？」
「はいぃぃ？　何のこと？」
「今度の発表会のこと」
発表会とは、２月末の佐藤教授門下生の声楽の発表会のことだろうか？　でも、なぜ？

「あの～、それって」
「そう、緑ホールの小ホールであるやつ。Ｆ女の佐藤先生の門下生のコンサート。君も出るんだよね？」
「あ……うん」
「じゃ、僕行くから。誰が来てもいいんでしょう」
「うん……５００円さえ払えば」と気乗りしない友里菜は言った。
「ワンコインでコンサートを聴けるなんて。それも、君の歌声を！
う～ん、楽しみ～～」

―　わー、なんか嫌味っぽい言い方！

「で、でも、なんでそのこと知ってるの？」
「今は、何でもネットの時代だよ、ネットの」
と洋平はのたまう。「ちゃんと載ってたよ。君は僕のディーバ（歌の女神）だからなぁ」

―　よくも言うよね、あつかましい！

ケータイを切った後も、何だか嫌な感じが残った。

再び深呼吸をして、ケータイを取るとまたまた着メロ。
「今度は誰よっ。うっ、仲本君！？」
友里菜は再度ケータイを耳に当てる。
「もしもし、柿沢さん？　今、いい？」と、気弱そうな寛之の声がした。イケメンなのに、どうしてこんな自信の無さそうな声を出すのか、友里菜はそこがどうも気に入らないが。

「いいわよ」
「あのさー、友人から聞いたんだけど……君ってどこかで歌歌うんだよね」

―　ありゃー！　又か！

「うん、そうだけど」
「やっぱりそうか。友人のカノジョがF女で、会報に載っていたっていうから、君もかな～っと思ってさ」
「ええ、まぁ。大した歌じゃないけど、一応モーツァルトのオペラからのアリア」
「うわ～～、凄いなあ！　行ってもいいよね」
「え？　あ……ええ」と曖昧に答える友里菜だった。
「良かった～、一度そういう場所に行ってみたかったんだよ。そういう華やかな場所に」
「全然華やかじゃないけど……まあ一応、みんなドレスとか着てるし」
「いいね～」と寛之は、うっとりと言う。「じゃ行くから、いいよね。君って、ディーバなんだね」
「あ、はいぃぃぃぃ、どうぞ。でもディーバって言うほどじゃ……」

―　って、どうすんのよ！　もしも二人が知らずに来て、並んで座っていたりしたら！？

友里菜の心は恐慌に陥って、とても芳人どころではなくなっていき、遂にその日は芳人にはメールの返事すら出来なかった。

38　奈落の底

38　奈落の底

とうとう、友里菜からは何のレスもなかった……。
「全滅」だけしか書いていない態度が、友里菜の自尊心を傷つけたのだろうか。けれども今は、芳人はそれしか書けないのだ。
「全滅」「殲滅」「大失敗」「敗北」「負けた」「落っこちた」「もうあかん」……脳裏に浮かぶ言葉と言ったら、それしかない。

反対に、羽島淳平は、やっと私立の二校に合格した。大阪と関東にある私立で、決して全国的に知られているほどではないが、かろうじて面目を保ち、やっと父親に認められたのだった。
けれども、一緒に見に行った大阪の私立医大にも、親友の芳人の名は無かった。それが最後の砦だったというのに……。
「わーー、あったーーーー！」と叫んだ後、淳平はハッとして横の芳人を見つめたのだ。そして心優しい淳平は、芳人の前で歓喜の叫びを上げてしまったことを恥じた。
芳人はガックリと肩を落とし、無言だった。

―　しまった！　芳人、落ちてもうたらしい……。

淳平はオロオロしたが、けれども直ぐに芳人の方から声を掛けた。
「良かったな、淳平」
「う、うん、まぁな～、ありがとう。けど」
「もう言わんといてや！」と芳人は精一杯虚勢を張る。「まあ、実力無いからしゃーないな」
「何か、済まん気持ちや」
「そんなことないって。さあ、ぼちぼち帰ろうか」

「手続きしてから、帰るわ」

本当は二人の合格を確信していたので、帰り道には酒場に寄って、祝杯を挙げるつもりだったのだ。けれども、あてがはずれた二人は、何とか自分達の心を誤魔化しながら家路を急いでいた。

芳人は、暗い谷底に落ちていくような気がした。まさに、「奈落の底に落ちる」とは、こういう事を言うのだろうか？

「な、淳平。お前の祝杯を挙げてから帰ろうや」

「けどぉ……」

「いいやん、いいやん。俺達、１９歳には見えへんからさ」

「そーいう事じゃなくて」

「例え未成年でも、気にしぃへんような店に入りたいな」と芳人はひきつった微笑を浮かべながら言った。淳平は、芳人の気持ちを察すると、近くの酒場に入った。

中はまだ夕刻前のせいか、そんなに人は居ない。ちょっと柄の悪い店だったせいか、二人の年齢など気にも留めていないようなのが幸いだったが。

「あんちゃんら、何飲むん？」と店のオヤジが尋ねた。

「ええっと、、、、、酒！」と芳人がイの一番に言った。

「日本酒？　ええ酒あるでぇ～」

「いや、安いのでいい」

「ほんまか？　悪酔いするで～。けど、学生さんのようやから、お金無いねんな」

店のオヤジは、コップにとくとくと酒を入れた。

「あのぅ……僕は、水割りでいいから」

と淳平がおずおずと言うと、

「あんちゃんの方は、酒弱いんかいな」とオヤジは察する。

「何かあったんやろな、お隣さんは」
「うん、まぁ、なんちゅーかな……」
淳平が躊躇っていると、
「カノジョから嫌われたんや」と芳人が勢いよく言い放った。
「おいおい、それはないで」と淳平がたしなめるが、芳人はもうやけくそになっていた。

「そうやて。だって返事もないもんな。普段やったら、友里菜、直ぐにレスしてくれるのに。どうせ、どうせ、俺みたいなへぼい奴は、気にいらんのやろ」
「そうかぁ、あんちゃん、オンナに捨てられたか〜。結構いい男なんやけどな」
「まあ、オンナという程のものでもないけどさぁ」
と芳人は意気がる。「けど冷たい奴やわ」

「なあなあ芳人、もう酔っ払ったん？」
「気にするなって。今日は、もうどんどん飲んじゃるわい！」
「はー、厄介なことになっちまったよな〜」と淳平は呟いたが、内心、友里菜に対する不信感を抱いたのだった。

―　芳人は、もうあのカノジョとは、別れた方がいいのかも……？

そう感じた淳平は、横で芳人が汚いカウンターに突っ伏して、泣いているのに気付いた。大柄な芳人の肩が上下に震え、涙を見せまいと両手で顔を隠しながら。
「おやおや、あんちゃん、よっぽど堪えたんやなぁ〜。まあ、今晩は大いに飲んで、憂さを晴らしぃや。人生、山あり谷ありやで」
芳人はこの言い古された言葉を、初めて肌で実感したのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9687k/

過ぎ去りし日々～大学編～

2011年10月3日03時35分発行